海

都神紗茅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海

【Ｎコード】

Ｎ４５０５Ｃ

【作者名】

都神紗茅

【あらすじ】

新一と蘭は久方ぶりの再会を果たす。しかし、新一の『やっかいな事件』にはまだ続きが残されていた。彼らが二人揃って、彼らの思い出の地へ再度行くことは出来るのだろうか――？この作品の設定は『原作より少し進んだ未来＋組織系＋シリアス＋オリキャラ複数登場』となっています。苦手な方はご注意を。

1. The promise that she wants to achi

この作品は、以前掲載していた『海』の基本設定を整理・再編集したものです。

1. The promise that she wants to achi

目に映る美しさとは裏腹に、どこか寂しく感じさせる波の音。
寄せては返し、砂をどこかへとさらってゆくその姿。
そして、その上に浮かんでいる真っ赤な太陽……

ここは、とある海である。
一人の少女にとっては、ただの”海”ではない海。
思い出がたくさん詰まった、大切な海。

その少女は、海風に揺られる髪をさりげなく直しながらその景色を見ていた。

少しばかり歩き出し、波に近づいていくと。
静かにその場にしゃがみこみ、片手を出し、乾いている砂をそっとすくった。
それは、すくい上げた瞬間、指の隙間からスルスルと地に還っていった。
恐る恐る少女が手を開いてみると、手の上にはほんの少ししか砂は残っていなかった。
そこから視線を移し、またあの青く無限な水たちを眺めた。

その瞬間、ここに来て今までで一番強い海風が吹いた。

あまりの強さに、少女はぎゅっと目を瞑った。
静かにまぶたを開いてみると、手の上にあったはずの砂は、全てどこかへ飛んでいってしまっていた。

「どうして」

ぽつり、と呟いた。
少女の周りには、何人かの観光客がいた。
カップルや家族連れ、友達同士など様々な組み合わせで。
しかし彼らには、少女の呟きは聞こえていなかった。
勿論、少女がどんな思いでこの場所に来たのかということも、一切知らない。

「やっぱり、あんな昔のこと……覚えてるわけ、ないか」

一つため息をついて、少女は立ち上がった。
ここは、数年前のある出来事の前までは、美しい思い出の残る場所であった。
少女にとって…いや、少女だけでなく、今の少女の心の中にいる人にとっても。
それがその人の記憶の中に残っていなくても、その思い出は存在していた。
もっとも、少女にとってその思い出は過去形などでは表せず、現在進行形だ。
波音が、少女の耳を通って全身に響いていく。段々、大きな音へと……

その思い出は、何年も前のある日、今の少女がいるのと同じ海でのことだった。

天気は、雲一つない快晴。真上でギラギラ輝く太陽。
その光をキラキラと反射する、海を構成する波の一つひとつ。

その海に向かって、当時の幼かった少女は思わず駆け出していた。
考えるよりも先に、まず近づいてみたくなった。
こんなに綺麗なものが、存在しているなんて、と。
初めて見るものに、心をときめかせていた。

日差しに焦がされた砂で、足の裏がとても熱かった。
サンダルから伝わる、砂の熱さ。
その上を、少女は時々止まりながら走っていった。

砂の中にわざと足を埋め、熱くてまたそこから抜け出す。
それを何度も繰り返しながら、砂漠の中に広がるオアシスへ到着。
少女は海水で濡れ、打ち水のごとく少し冷えた砂を踏みしめ、静かに近づいていく。
乾いたものとはまた違う感覚に、一旦立ち止まってしゃがんだ。
少女は手を伸ばして触れてみると、まるで泥んこみたいな触り心

地と感じた。

「つめたい！」

そう呟いてから、少女は嬉しそうに両手を使って泥だんごを作り始めた。

しかし上手く形作れず、少女の指の間からは泥になりかけの砂がボロボロと崩れていった。

「ちからがはいりすぎだよ」

その声に少女は一瞬振り向いて、すぐ手元に目を戻した。

崩れ落ちたのをもう一度すくい上げて、今度は軽く形を整えた。

「そうそう、そんなかんじ」

さっき後ろから聞こえた声がいつのまにか、少女の右から聞こえた。

少女は声の主に向かってパアッと顔を輝かせて、すっと立ち上がった。

何かを言葉にする。しかしそれは、現実へと戻り行く意識に消され……。

波の音が、段々小さくなってゆく。少女は、はっと我に返った。
腕を後ろに回し、右手の指と左手の指を絡める。
海の上に浮かんでいた太陽は、姿を隠しつつあった。
あたりも、少しずつ、暗くなってきていた。
周りにいた観光客も、それぞれの片づけを始めている。

（そう言えば、あんなこともあったっけ）

あの日の夜。そこの海では、花火大会が行われていたのだ。
少女は砂浜に座り込み、それが始まるのを心待ちにしていた。
ウキウキと心を躍らせて、暗い海をじっと見つめていた。
少女のいる砂浜から少し離れたところが、打ち上げ場所であった。

そんな中。急に手を引かれた。

その方向に少女が目をやると、あの人とそのお父さん。
手を引いていたのは、あの人だった。
あの人は、少女に向かって遠くから呼ぶように叫んだ。

「オレたち、もっとはなびがきれいにみえるばしょ、しってるんだ

！」

しばらくかけていくと、木の枝で隠された入り口のようなものが少女の目に映った。
一つの単語で表すならば、ジャングルみたいなもの。
手をぎゅっと握られつつ、そこを掻き分けて三人は入ってゆく。
そこを出てみると、海しか見えない、何もない高台のようなものがあった。
細長い蔓（つる）がところどころから出ていて、何の種かも知れない植物だらけの。
人工か自然か、誰かここに入ったことがあるのか全く無いのか。
よく分からなかったまま、少女は二人についていく。

それと同時に、花火が打ち上がり始めた。

「わぁ、きれーい」
「だろ？　ここは、オレたちがいつもはなびをみているところなんだ」

自慢げにあの人は話す。花火と、少女を交互に見ながら。
真っ暗な海に反射する、綺麗なスターマイン。
ここからは少し遠い光。だけど、高台の上の三人の心を明るく照らす。

夜空に上がる七色を見ながら、少女は隣に座るあの人に言った。
「また、ここにきたいね。うみであそんだり、はなびをみたり」
少女には、言葉に表せないくらいに言いたいことがたくさんあり、その場は逆に静かになった。
特大の花火があがり、辺りに風物を感じさせる音が鳴り響いた。それにびっくりしてから、あの人は、静かに頷き、言った。
「じゃあ、やくそくしよう。ぜったいに、またここにくるって」

少女はそう言われたことを、今でも覚えていた。
その少女の名前は、毛利蘭。
そして、その約束は、未だ果たされてはいなかった。

1. The promise that she wants to achi

サブタイトルの直訳：彼女が果たしたい約束

2. His words that she remembers

「大丈夫。絶対、生きて戻ってくるから」

それは、蘭に告げられた彼からの最後の言葉であった。
それ以来、彼の携帯には一切繋がらなくなってしまった。
『電波が届かないところにいるか、電源が入っていないため、かかりません』の冷たい電子音しか返ってこない。
当然、何通ものメールの返事は全くない。

その言葉が蘭に告げられたのは、丁度ここから二年前のことであった。
”夏”と言う季節の中で何度も繰り返される、この日と同じようなありふれた日常。

「もし、仮に、の話だ」
「えっ？」

五月蝿い蝉の鳴き声が響く中、その声は空間をすり抜けて蘭の耳に届いた。
その話し方が、如何にも突発的でその先を知りたくなってくるものだったからかもしれないが。
また彼贔屓の探偵についての自慢話かと、蘭は思った。
そんな蘭の目の前にいた彼は、新聞をすっと降ろして、顔をのぞかせた。

驚いた。予想していた彼の表情と、全く違っていたから。
その顔は、蘭にとって彼が真剣だと考えている顔よりも更に真剣だった。
これから嘘を吐く、などという台詞は似合わなかった。
それどころか、正反対と表した方が”似合った”。

「オレが明日死ぬとしたら、オメーはどうする？」

蝉の声。窓から零れる日差し。そして彼の真剣な表情。
蘭は、自分が思っていたより動揺した。
心臓の鼓動が、自分のすぐ隣にあるように思えた。
それを抑えるように、胸に手を静かに当てた。

「な、何言ってるのよ？」

やっと搾り出した声は、かすかに震えていた。
穏やかさを取り戻した日常。考えたくもないことを聞いてしまったのだ。
生きているものは、何(いず)れは死を迎えるという分かりきった現実が、今自分の目の前に広がるとしたら。

いつもよりも不必要に多い瞬きの数、どこか挙動不審な姿。
その蘭の様子に、彼はちょっとだけその表情を緩めた。
両手に持ったままの新聞を、ソファの上に乗せた。

「じゃあ、少し質問を変えるか。オレが明日いなくなるとしたら、オメーはどうする？」

少しだけ易しくなった質問に、まだ微妙な思いを抱えつつも答えた。

「寂しいよ。何も言われずに、いきなりいなくなっちゃうなんて。せめて自分には言って欲しかったなって、後悔すると思う」

言い終えると、彼は手元にあったコーヒーを一口すすった。カチャン、と音を立ててそのカップは元の場所に戻った。

思わず訪れた沈黙、蘭は居心地の悪さを感じた。立ち上がってこの空気を何とかしたい。せめて、この状況を――。

そう思い、適当な理由をこじつけて立とうと思ったとき。

「ごめん。躊躇わず、先に言っておくべきだった」

彼の言葉に、目の前が真っ白どころか真っ暗になった。嫌だった日々と、頭の中にまだ残る罅割れかけていた記憶が甦ってきた。

それだけではない。彼に忍び寄る、何かの気配を感じた。しかしそれを表情に出すことなく、蘭は冷静を演じることにした。

「事件の調査？」

「ああ。ホラ、オレが前に”やっかいな事件”に関わってただろ？それの続きみたいなもの。それのために、ちょっと家を空けなくちゃでな」

「解決したわけじゃなかったの？」

「オレが蘭のトコに帰ってこれたのは、その事件の序章が終わったのに過ぎなかったんだ」

「そんな……」

冷静は、あっという間に脆くなり崩れかけた。

どうしてよ？　あれで全部終わったわけじゃなかったの？

またわたしは、待たなきゃいけないんだ。
わたしの気持ち、考えてるの？
考え込めば考え込むほど、彼に対する罵りの言葉しか浮かばなかった。
その無理やりなこじつけを、成り立たせているように見せかけていただけだった。

「大丈夫。絶対、生きて戻ってくるから。何年かかるか分からないけど、その時には」

崩れそうな蘭に、彼は何かを言いかけた。
しかしそれを敢えて飲み込み、蘭の頭にポンッと手を乗せた。
いつもの彼らしい、生意気で少年（ガキ）っぽい笑顔を向けた。

「分かった。絶対だよ、新一」

”彼”こと工藤新一は、そう言った蘭をそっと抱きしめた。
言いかけた言葉を、いつか絶対に蘭に伝えようと決心しながら。

2. His words that she remembers（後書き）

サブタイトルの直訳：彼女の心に残る彼の言葉
この話でのキーワードは『穏やかさを取り戻した日常』『嫌だった日々』『頭の中にまだ残る罅割れかけた記憶』ですね。これらから”2年前”がいつ頃のことなのか分かると思います。

3. Which is my true feeling?

波音が、だんだんと寂しさを増してきた。
周りも大分暗くなっている。腕時計を見ると、もう六時。
夏ならではの、日が伸びているお陰でその時間とはこれまで感じられなかった。

まだ耳に微かに残る新一からの最後の言葉を思い、蘭は絡めていた手をそっと離した。
そして体の真上に両方とも持って行き、手を組む。
空に向かって、手を発端に背伸びをぐっとした。

「わたし、何やってるんだろ」

両手の力を抜いて体の横に降ろしてから、またぽつりと一言。
思い出に浸り終えた直後、蘭は急に客観的になった。
二年も前から連絡を取ってない人が、あんな昔のここでの約束なんか、
覚えてないんじゃないか。その連絡を取らなかった時にも、別の約束をしたし。
そんなことを、頭の中のどこかでやっと思い始めたから。
自分で言うのもなんだけど今更遅いのかな、と自嘲気味で更に思った。

そんな蘭は、新一がいなくなった直後から、やたらと告白を受け

るようになった。
彼らの意図はよく分かっていないが、それらの全てを蘭は断っている。
その中でも、一番ある意味で蘭の心に残っているものがあった。
勿論、このある意味が良い意味と言うことはさらさらないが。
それは、新一がいなくなった直後・高校のある先輩からのもの。
詳しく言えば、告白を断った後の彼の言葉が忘れられなかった。
それは、
「工藤はまた、事件かなんかでどっかに行っちまったんだろ？　この前も、そんなことあったけどさ……流石に二度目だと、いくら毛利が工藤を待っててても、あいつだって心変わりするかもしれないじゃん」
と言うもの。
その先輩にとっては、軽い冗談に近かった言葉であった。
しかしその時の蘭は、彼に底知れない怒りを覚えたほどであった。
新一の決意の重さを、新一自身の態度や口調から、直接受け止めたから。
そんな蘭は、全く躊躇（ためら）わずにすぐに言い返した。
「アイツは、約束を破るような人間じゃありません。それに……わたしは、アイツを信じてますから」
あの時の自分と、客観的になった自分は、違ってしまっているん

じゃないか。
どこか、温度差があるような。そんな気がしただけだが、蘭はそれに複雑な思いを感じた。
そんな気がした時点で、自分はもうそういうことになってしまっているのではないか、と。
ふとしたことで、疑問は確信に変わってしまう。
空と海の境界線を見ながら、蘭は思わず新一に向かって心中で問いかけた。

（ねぇ新一、わたしはどうすればいい？）

そんな中、人気（ひとけ）のなくなった砂浜から砂の音が聞こえた。
人の足が乾いた砂を踏みしめるような、ゆっくりとした間隔で。
波音の中で、それは蘭の迷える心を引き止めるようだった。
でも、これはまだ二年前の自分でありたい自分が作り出している妄想かも知れない。
何でもかんでも、都合の良い方向に考える自分の心が。
蘭はそう思っていたが、砂の音は確実に蘭へ近づいてきていた。
それが大きくなるたびに、早まる心臓の鼓動。
蘭は、静かに後ろを振り向いた。

3．Which is my true feeling？（後書き）

サブタイトルの直訳：「わたしの本心はどっちなの？」
あえてここは、蘭の台詞をタイトルに採用してみました。

まだ3話までしか更新してませんが、？と思われる部分があるかと思いますのでとりあえず色々と整理します。
ここまでの話で分かっている若しくは予想できることは、

・これは、原作よりも未来の話。
↓2話の『穏やかさを取り戻した日常』『嫌だった日々』
『頭の中にまだ残る罅割れかけた記憶』より

・”やっかいな事件”は未解決？
↓2話の回想での新一の言葉と、全体の描写より。
しかし今のところ蘭サイドのみの描写で成り立っているので、新一がいなくなった本当の理由かどうかは分からない。

・2人は両想いになっている。
↓2話の最後の描写より。

・蘭はコナン＝新一と言うことは知っている。しかし”やっかいな事件”の内容は知らない。
↓3話の蘭の描写より。

こんな感じです。
大分色々喋ってしまった感が否めませんが・・・

4. Hope to the future

懐かしかった波の音をどこか不気味に感じるほど、周りは暗くなっていた。
そんな中に浮かび上がる、二つの小さな影たち。
大海原に紛れて消えてしまいそうな蘭は、目を見開いた。

「どうして？」

そう消えゆくように呟くと、話しかけた相手はそれに答えることなく蘭に向かって歩いてきた。
真剣とも言えるが、良く良く見るとどこかぎこちなかった。
そんな彼は、蘭から数メートル離れたところで立ち止まった。

「工藤は、ここには来(け)えへん」

彼は、かつて新一と東西の高校生探偵として有名だった服部平次。
最近連絡を取っていなかったので、少し身長が伸びて、大人っぽくなっていたように見えた。
何故、彼がこの場所に自分がいることを知っているのか。
蘭の頭の中には疑問しか浮かばなかった。それもたくさん。

新一のことを知っているのか。

それが一番、聞きたいことであった。
それをまずに聞こう。早く知りたい。
蘭が話し始めようとしたら、蘭の心を読んだかのように平次が先に言葉を発した。

「工藤から聞いたんや。昔姉ちゃんと約束を結んだ海があるから、そこに行けば姉ちゃんはいるだろうって言うてたんや」
「でも、どうしてそれを……いつ新一と話したの？」
「今日。今日、工藤から電話があったんや。それを姉ちゃんに伝えよ思て、オッサンに電話したんやけど、姉ちゃんはいない言うてなァ。でも工藤が、もし姉ちゃんが家にいなかったらここの海にいるだろうからと言ったんや。今日、ここで花火大会があるんやろ？」
「う、うん」

そう。新一と蘭がかつてここに来たときにやってきたときには、花火大会が行われていた。
だから蘭は、その花火大会が行われる日にここへやってきたのだ。
ちなみに今日は、あと一時間半で行われる予定。

平次の話に一旦は納得したが、すぐにはっとして平次に詰め寄った。
冷めてしまった気がしていた心は、すぐに熱くなった。
話がしたい。顔が見たい。存在を感じたい。やっぱり、会えるなら会いたい。
そう思う気持ちが、束になって心に押し寄せてきたのだ。

「服部君、新一は今どこで何してるの？　どうして連絡も取ってくれないの」

今にも泣き出しそうな顔で詰め寄ってくる蘭に、平次は見ていられなくて思わず目を逸らした。

「ねぇ、答えてよ……服部君」

何も言わない平次に、蘭の声はだんだん小さくなっていった。

平次の様子に、嫌な予感がすしたのだ。
新一は何を服部君に伝えたかったの？
どうしてわたしに電話しなかったの？
もしかして新一、もう……。

体から力が抜けていく。まるでそれが、自分のものじゃないみたいに。
手を握り締めようとしても、動かない。
そんな蘭に、平次は表情を僅かに崩した。

「工藤は」
「え？」

そして、一息ついて、蘭の目を見据えて言った。

「事情があってまだ連絡は取れないけど、元気だから、心配するな……やて」

蘭は、平次の言葉にひとまず安心した。
どこかで生きている、一番知りたかったことが分かって。
あまりにも連絡が来なかったから、最悪のシナリオが何度頭を過(よぎ)ったことか。
しかし、すぐにまた違う心配のまとわりついた疑問がどこからか湧いてくる。

どうして、もう電話が出来なくなっちゃうの？

「さぁ姉ちゃん、東京に帰るで」

平次の言葉が耳に届いたのになかなか気づかなくて、反応が幾らか遅れた。
目の前には自分の手を掴んだ、平次の姿。蘭は思わず腕時計に目をやった。
最初ここに来たとき、新一が来なくても大会の終わりが告げられるまで、
蘭はいるつもりであった。そして、今でも。気持ちはほとんど変わっていなかった。

「え、だってこれから」

花火大会が……

蘭がそう言いかけたところ。

いつの間にか黒に包まれていた空から、小さな水滴が幾つか落ちてきた。
それを合図に、平次は無理矢理に蘭の手を掴んで引っ張っていく。

「服部君？」
「雨、降ってきたやろ？　今日は天気予報で、六時頃から明日の明け方まで雨が降る言うてたんや。だから、花火大会は行われないやろ」
「でも、天気予報が外れることだってあるじゃない！」

直接言われたものの、蘭はまだ新一が来てくれるような気がしていた。
平次に言った言葉は、自分を驚かせるための嘘。そう思いたい蘭が蘭の中にいた。
意外に声を張り上げた蘭に、平次は目をぱちくりさせた。

しかし、すぐに表情を険しくして、

「アイツの声の様子で分かる。あの言葉は、嘘なんかやない」

「！」

はっとした蘭に、平次は一つ間を置いて言った。

「今日はここに来(け)えへんけど、一生会えなくなった訳やないやろ」

そして、再度蘭の手を引いて歩き出す。

平次の言葉に、蘭は心を落ち着かせることが出来た。

そう。まだ、会えなくなった訳じゃない。

その日が来るまで。新一を信じ続けよう。

また、この海で花火を見れることを夢見て。

「ありがと、服部君」

蘭は、前を歩く背中に向けて言った。返答はない。

だけど、それは悪い意味でないことだけは分かった。

4. Hope to the future（後書き）

サブタイトルの直訳：未来への希望

平次は、これから物語を進めていくにあたって重要な人物です。
今回だけでもう出番が無いだとか、そういうことはありませんので
ご安心を（？）。
関西弁、違和感があったと思います。すいません、そこは見逃して
ください。
作者は関東生まれ関東育ちの関東在住でありますので。

この話で、蘭編は一旦終わりです。
次回からは新一にスポットライトを当てて書いていこうかなと思っ
ています。
さて『やっかいな事件』は、本当に終わっていなかったのでしょう
か？
これまでの疑問点がいくつか解消されると思いますので、
今しばらくお待ちくださいませ。

5. A overture (1)

「それは、本当なのか？」

震える声が、或る広い部屋に響き渡った。
それは、二年前のこと。工藤新一と毛利蘭が再会する少し前。

コナンはＦＢＩらと協力をして、遂に組織の本部を発見した。
それなりに準備をして、乗り込んだ。
トントン拍子、とまでは行かないが最後の部屋に到達した時。
コナンらはそこにいた人物から、思いもがけない言葉を聞いたのだ。

「嘘ではないさ。まぁ彼らと連絡を取っていたのは私だけだった。
君たちが知らなくても不思議ではないだろう？　私の手下たちも一切聞かされていなかったからね」
「くそっ」

やり場のない思いを、両手に込めた。
それでも足りなくて、目の前の豪華な家具をも蹴り飛ばしたくなった。
コナンの小学生らしくないそんな様子を見て、
後ろに立つ者たちも思わず黙り込んでしまった。

「そんな君に、二つの物を差し上げよう」

コナンは、伏せていた目を、数秒かけて上げた。
どうしてオレに？　それに、一体何を渡すんだ？
こいつは、一体何を考えている？
その言葉の意味を視線で探ったが、分からなかった。

「二つの、物？」
「ああ。きっと、その両方を持っているのは国内では私しかいないだろうね。どうだ？　君に選択肢は二つ用意されている。話に乗るか、乗らないか」

こんな張りつめた空気をどこか楽しんでいるように、コナンにそう言った。

「一つだけ聞く。それらを受け取ると言うことは、同時にオレが何かを差し出す必要があるんだろ？　あんたは何を望むんだ」

慎重に質問をしたコナンの振る舞いと真逆に、クスリと微笑んだ。

「それは、君が二つの物を受け取ると決めてからだ」
「成る程？　どっちにしろ、あんたはそれをオレに受け取って欲しいんだな」
「フフ……流石だ。では、肯定、と受け取ってよいのだな？」
「ああ。たっぷり聞かせてもらおうか？」

それは、刑事が犯罪人を問いつめている場面に近かった。
二人のサイズは全くと言っていいほど違っているが、対等な立場にいる。

コナンは一息ついて、ゆっくりと歩を進めていった。
隙間なく組んだ両手を机に置き、大きな椅子に腰かけた姿。
余裕丸出しなそれは、どこか気に障った。
それと目を合わせられるところまで来て、コナンは立ち止まった。
「さぁて、その二つの物とやらを見せてもらおうか？」

「ああ。まずは、見えるものからな」
「見える、もの？」

コナンの言葉を聞くと、男は引き出しを開け、机の上に資料の束を置いた。
それの表紙に並んだ文字を、コナンは身を乗り出して眺めた。
一行読んだだけで、明らかに驚きを露わにした。

「！　まさか、これは」
「今の君にとっては、一番必要な物だろう？　喜んで戴けたかな」

コナンの後ろにいる者たちの殆どは、それが何なのか予想もつかなかった。何人かを除いて。
少しばかり躊躇ってから、コナンはそれを手に取った。新しそうな紙の触り心地がした。
露わにしてしまった驚きを隠して、ポーカーフェイスに戻す。

「んで、もう一つの目に見えない物ってのは？」
「それは、まず君に差し出してもらう物の話をしてからだ」
「ああ、そうだったな」

一番聞きたかったことだったが、目まぐるしく動く状況に流され忘れかけていた。
自分がまだ体験したことも無い重苦しい空気の中にずっといたせいでもあるが。
コナンの目の前にいる男は、手の組み方を変えて話し始めた。

「さっき私は、組織はここに存在するものだけでは終わっていない、と言った」

その言葉は、この場面の少し前にコナンが初めて耳にしたもののことだ。

改めてコナンは、自らの耳を男の声を聞き取ることに集中した。

「その意味、君には分かるか？　愚問だとは分かっている。君の考えを、聞かせてくれ」

少し考え、まとまりきっていないままコナンは一言、ぴしりと言った。

「組織は、全世界を又に掛けているもの。つまり、ここだけを潰しても、本部を潰さねーと意味がないと言うことか？」

5. A overture （1）（後書き）

サブタイトルの直訳：序曲（1）

この場面はもうちょっと長くなるかと思います。
あと1～3話位ですね……実際書いてみないと分かりませんが。

追記（と言うか、変更と言うか）
ここで私は、あの方の名前を何故出さないのか当ててみてください的なことを書きました。
誠に勝手ながら、最終回にて発表するのはあの方の名前だけに止めさせて頂きます。

何故出さなかったのかあえてここで書かせて頂きますが、実はこの『海』へと繋がる話を連載しようかと考えていたんです。俗に言う「組織壊滅話」の予定でした。
しかし、

・『海』自体の更新が中々出来ていない
・また新しく連載を始めたところで、状況が良くなるとも思えない

と言う二点を踏まえて、悩んだ末にその話を書くことを断念いたしました。

これは作者の軽率な言動が招いた事態であり、また勝手な判断だとは重々承知しています。
本当に申し訳ありません。

2008．3．25

作者@都神紗茅

6. A overture (2)

緊迫感のせいで息苦しい部屋の中、コナンの声は大きく響いた。
腕を組む男性は、躊躇うことなく温くて湿っぽい空気をごくりと飲み込んだ。
そして両手の戒めを解き放ち、コナンに向けて高らかに拍手を送った。

「フフ、見事だボウヤ。君なら分かっていると確信していたよ」

空気を読めない乾いた音は、コナンの感情を逆撫でした。
でもまだポーカーフェイスを装う余裕があったので、それを顔の上に張りつけて構え直した。
男は更に話を続けた。

「確かに我々は、氷山の一角に過ぎない。ここに入るときの君の心は、少しの安堵感と大きな緊張感で支配されていたであろう。しかし、今ではどうだ。全く同じとは言えないだろう？　そこにあった安堵感など消えてしまったはずだ。その変わりに、底なしの絶望が君の心に巣くっているのではないのか」
「く……っ」

何もかも見透かしたような瞳に吸い込まれそうになって、コナンは資料の束を両手で握りしめ床に足をつけた。
それでも、今の空気を鋭く切り裂く男の冷たい視線から逃れることは出来なかった。
誰の目から見ても、あからさまに動揺しているのが分かるコナンの姿。
男にとって彼の心を読み取ると言うことは、容易かった。

「ここまで言えば、私の望むものが分かっただろう？」
「あ、ああ。嫌なくらいにな」
寒気を伴った震えを含んだ声を、定まらない場所に染み込ませた。
いつの間にか、声だけでなく全身がカタカタと震えだしていた。
（くそっ、最初からコイツはオレをはめる気だったのか）
絡み合った幾つもの糸が、所々で解けなくなってゆく。
止めようと思っても、自分の精神だけでは何も出来ない。
そのせいで、今視界に映る当たり前のことでさえ虚無に思えてくる。
らしくないと分かっていたが、最早”神”に助けをも乞っていた。
「私は、君を試しているだけだ。はめた気などないさ。さて、もう一つ――見えないもの、について話そうとしようか？」
心を読まれたような気がして、余計に動悸が激しくなった。
重くなった頭が床に落ちないように気をつけながら、そっと頷いた。
フッ、と男は笑みを漏らした。
「それは、必要以上に広がってしまった氷山の中心に辿り着くヒント」
「！」
「君の言う”本部”の場所だ。それは……」
「そ、それは？」
男は、また手を組みなおした。
「君が敬愛する、シャーロック・ホームズに所縁（ゆかり）のある都市さ」

（ロンドンか！）

体の震えが一瞬にしてピタリと止んだ。
表面の乾ききった両目を見開き、唇をぎゅっとかみ締めた。
何となくは予想していた都市の名前であったから。
何故そう予想できたかは、コナン自身も分かっていなかったが。

「君がそこに行く日は、好きに決めればいい。向こうでは私の知り合いを頼ればいい。予め、君の事を伝えておく。だから、早くここを出て行くがいい」
「……」
「どうせここの支部は終わりさ。とばっちりを喰らう前に、早く」

コナンは無言のまま男を一瞥すると、数歩だけ先へ進んだ。
しかし途中で、紐に繋がれていてそれに引かれたように立ち止まった。

「アンタにしては意外だな。二つじゃなくて、三つもくれるなんてよ」

それだけ男に声を突き刺すと、髪を揺らして部屋から出て行った。
頑丈な扉が開かれたことで、湿っぽかった空気も一緒に出て行く。
それらに向けて、男はひと言だけ呟いた。

「健闘を祈るよ、工藤新一君？」

6. A overture（2）（後書き）

サブタイトルの直訳：序曲（2）

相変わらず亀更新で申し訳ないです；；；

色々と語りたいことはありますが・・・これで確定したのは”やっかいな事件”は終わっていなかった、と言うことです。

7. It has already begun.

“あの”男に貰った資料のお陰で、解毒剤が完成した。それを飲んだお陰で、無事に工藤新一の姿を取り戻した。

自身最大の目標を達成したはずなのに、だ。しかしそれは、あくまでもあの男から話を聞いた時までの目標だ。そんな新一は、喜びを殆んど感じていなかった。一番彼の中で大きかったのは、自らの運命を嘆き悲しむ気持ち。

これまで、新一は“蘭のために”元に戻ろうと思っていた。しかしいざ戻ってみると、いかに自分がただの人間であるかが分かった。どんなに善良でお人好しな人間でも、心のどこかでは必ず自己中心的なのだ。

「ちょっと、聞いてる？　工藤君」

自分の運命を嘆き悲しむ気持ちも自己中心的だからなのだろうか、と少しの疑問と大きな確信を持って自問する。答えが返ってこないのは承知の上でだ。

「工藤君！」

「え？」

我に返ると、目の前には哀の呆れ返ったような表情があったのに気づいた。ちゃんと話を聞いてるの？　と言われている気がして、

「わ、悪(わり)いな。で、何の話だっけ？」

哀が、何も聞いてなかったのねと一言口元から漏らすと、だから、と続けた。

「あなたが飲んだのは完璧な解毒剤だったと思うわ。でも念のために、向こうに行く前に試験期間を設けた方が良いと思うんだけど」

解毒剤を飲んでからの新一の体温や脈拍数などのデータを記した紙を見ながら、すっかり身長差が広がった新一を見上げた。

新一はそれをなくすためにしゃがみこみ、言った。

「んじゃ、期間を設けるとしたら大体何日くらいがいいんだ？」

「そうね……一週間が妥当じゃないかしら」

（一週間か）

新一は哀の言葉を、テープで再生してまた巻き戻すように何度も反芻した。

そんな新一の様子に、哀は釘を差した。

「あなたには、まずやらなきゃいけないことがあるじゃない」

「！」

哀の、確実に心を仕留めた釘に、新一は今この時にも既にカウントダウンが始まっていることを悟った。

自分が今からしようとしていることが後悔に繋がるとしても、今やらなくては二重に後悔することになる。それを全身全霊に刻み込んだ。

「いつも色々とありがとな？　オレ、本当にお前に助けられてるからさ」

「……」

それだけ言うと、玄関にある靴に足を引っ掛けて家を飛び出した。扉が閉まりきるまで、新一の足音が段々と遠退いていくのが分かった。

誰もいない冷めきった空間に、哀の温(ぬる)いため息は目立った。

「バカ」

外を駆ける新一が向かったのは、毛利探偵事務所。

新一の家からそこまでは、そんなに距離はない。この時も、ものの十分で到着した。

乱れた呼吸を整えながら、焦る気持ちを抑えつつコンクリート剥き出しの階段を上がっていった。

まず、事務所の扉をノックした。数秒たっても返事は何もなかった。思い切ってドアノブを回して開こうとすると、鍵がかかっていることに気づいた。

（今日は土曜だよな。おっちゃん、事件の依頼でも受けてんのか？）

とりあえずドアノブから手を離して、もう一階分階段を上がった。探偵事務所の上は住居スペースだから、こっちの方ならいる確率が高いだろう。そんなことを思いながら、そちらの扉の前に立った。

チャイムを一回鳴らした。やっぱり誰も出る様子がなかった。それどころか、人のいる気配もない。

（園子とどっかに行くとか言うメールも来てないし、部活でも行ってんだろうな）

そう思い、とりあえず事務所の前で蘭の帰宅を待つことにした。

7. It has already begun.（後書き）

サブタイトルの直訳：それはすでに始まっている

これから、出来る限り毎日更新していこうかなと思います。自分が書きたいところまで全然届いていないので…。あ、その内容はまだ秘密ですよ（＾＾）

8. The confession

どのくらい階段に座り込んでいたのか分からない。そんな中、雨が降ってきていたことにやっと気づいた。

さっきまで日本晴れと言う言葉が似合う天気だったから、まだ帰ってこない蘭が心配になった。

「どっかで雨宿りしてれば良いけどな」

何気なく呟いた言葉は、限りなく聞こえる雨の音にかきけされた。

そんな一方で、新一の背中に迷いがのし掛かってきていた。蘭を待ち、蘭を想うごとにその迷いは揺るぎないものへと近づいていった。

これから本当に、会ってしまっても良いのだろうか？　何も言わずにいる方が、確実に蘭を傷つけずにいられるんじゃないのか？

後者に後押しされ、新一はやっと体を階段から離した。そして、雨の降る道路に向かって歩き出した……その時。

「新一……？」

景色が、あっという間にスローモーションに変わった。それに合わせて、自分の顔の動きも遅れた。

新一の視線の先には、折り畳み傘を差した蘭の姿があった。彼女は目を大きく見開き、今にも傘を落としそうに見えた。

「よぉ、蘭」

さっきまで迷ってたくせに。もう後戻り出来なくなってしまったじゃないか。　新一は自分に言い聞かせた。しかし、蘭の表情が明るくなるのと比例してさっきまでの迷いが薄れていくのが分かった。

「もう、びしょびしょじゃない！　ホラ、とにかく中に入って。タオル貸すから」

「あ、あぁ」

断ることも出来ずに言われるがまま、また階段を上がっていった。さっき自分がいた場所に、服から水が滴り落ちていく。

「ねぇ、いつからあそこにいたの？」

「さっきから、かな」

蘭に無理矢理タオルにくるまされた上に事務所の椅子に座らされ、新一は曖昧に返した。

蘭はもう、と軽く声を出すと、

「いっつも計画性ないんだから。帰ってくるなら連絡ぐらいしてよね」

「ごめん」

蘭の言葉が、全身に痛く突き刺さる。蘭にとっては只の意地っ張りなのだが、今の新一にとっては心臓に悪いものだ。

（そうだよ、オレはまたオメーを突き放すことになっちまった。それなのに、またオメーに会ってる。ひでぇ男だよな）

自己嫌悪に襲われていた新一を知ってか知らずか、蘭は表情を柔らかくして呟いた。

「でも嬉しかった。ずっと、会いたかったんだから」

「！」

気づいた時には、新一は椅子から立ち上がっていた。蘭の目の前に体があったことも、それと同時に目にした。

新一の、頭に載せたタオルが床に落ちる程の勢いに驚いて、蘭は間抜けな声を漏らした。

「し、新一？」

「オレさ、オメーに言わなきゃいけないことがあるんだ」

「え……？」

激しかった行動と思ったより落ち着いた言葉の差に、蘭は目を真ん丸にして新一を見つめた。

新一はそれから一息ついて、躊躇いがちに言った。

「江戸川コナンは、オレなんだ」

「コナン君が、新一？」

新一の既に消えた声をもう一度口にして、蘭はそれきり、目線をどこか分からないところへとやってしまった。

これだけは必ず蘭に言おうと、前から新一は決めていた。例え、それから解放されたことが、一時の気休めにしかならなかったとし

ても。

「じゃあ、ずっと前からわたしの気持ちも分かってたってこと？」

顔を上げ、自分の目を見据えた蘭から、予想の範囲を超えた言葉が返ってきて新一は思わずたじろいだ。

8. The confession（後書き）

サブタイトルの直訳：告白

9．Soaking words

雨は、さっきより激しさを増していた。空を目一杯に埋め尽くす雲は、それを見る者の心にも影響を及ぼした。

蘭の思いがけない言葉に新一は返答出来ず、黙り込むしか他に手立てがなかった。

「正直ね、新一から実際に聞いたとき……やっぱりって思ったんだ。コナン君、本当に新一にそっくりだったから」

どこか懐かしむように、そう言った。コナンが蘭の元から姿を消して、結構日が経っていたのだ。

瞳に映る蘭の表情は、優しい微笑みを含み、憂いを帯びていて綺麗だった。ガラスの向こうに見える雨の筋が、それを際立たせていた。

こんな蘭を見たのは、いつぶりだろうか。そもそもコナンでいた間には、こんな心からの微笑みなど見ることもなかった。

彼女が自分より先を歩いているような気がして、新一は畏れつつ言葉を振り絞った。

「だったら、どうしてオレに何も言わなかったんだよ？」

蘭の微笑みが微かに崩れた。愚問だよ、と直接言われているように感じた。

「ばか。分からないの？」

そう言えば前の学園祭の時服部が言ってたな。自分のことを分かってない、蘭はお前からの言葉を待ってるんだ、と。今は昔のそん

なことが、急に思い出された。
新一が言葉の予想に確信を持って重力に任せて頷くと、蘭は少し躊躇って、
「新一が言ってくれるまで、聞いちゃいけない気がしたの。わたしが正体を疑ったときだって、新一ずっと否定してたじゃない」
「だから、それは」
奴らとのことに蘭を巻き込みたくなかったから
（ダメだ、絶対に言っちゃ。まだ事件は終わっちゃいねーんだ）
一週間後のことも、必ず言わなくてはいけないんだ。改めて、自分の運命を思い出した。こうやって蘭と対等に話が出来るのも、あと一週間。
蘭は辛そうな表情を漏らした新一に、両手をぎゅっと握り締めた。
「ごめん、責めてる訳じゃないの。わたしは真実が知りたかっただけだから」
いつも自分が口癖のように言っていた言葉を耳にして、新一は再度黙り込んだ。
そんな様子に蘭は、笑顔を無理矢理取り繕って言った。
「でも、新一が言いたくないなら別に良いよ？　言ってくれるまで待つから」
「何でオメーは、いつだってオレを待っててくれるんだ？」
新一の言葉に、蘭の表情からひ弱な笑顔が剥がれ落ちた。その様子を間近で目にして、新一はやるせない気持ちを抑えきれずに蘭か

ら体ごと逸らした。
唇をきゅっと噛み締めてから、蘭は新一の後ろ姿を見つめた。
「好きだから……」
新一は、蘭の言葉の感触を確かに背中に感じた。
驚きを隠せないまま、静かに振り向いた。
「新一のことが、好きだから」
自分にも言い聞かせるように、蘭はもう一度言った。
新一は一旦目を伏せるのと同時に俯いてから、蘭へとゆっくり歩んでいった。彼の靴の音は、大きく室内に響いた。
「し、しんいち……？」
目を丸くしていた蘭を、まるで神聖な儀式のように新一はぎこちなく両手で引き寄せた。ただでさえ大きかった蘭の瞳は、更に開かれた。
「オレだって……ずっと、言いたかった」
何を？
「蘭のことが、好きだって」
本当に、自分が言いたかったのはそれなのか？
新一の心の声に気づかない蘭は何も言わず、ただただ新一に顔を

埋めていた。

新一から真っ直ぐ先に見える窓越しの外では、雨が止み雲間からオレンジの光さえ射し込んでいた。

しかしその本人の心の中には、全くと言っていい程一筋の光も見えなかった。

９．Ｓｏａｋｉｎｇ　ｗｏｒｄｓ（後書き）

サブタイトルの直訳：ずぶ濡れの言葉

《追記。》

第７部分の後書きにて更新のことに触れましたが、毎日の更新を続けた結果学業に影響が出てきてしまいました……。毎日の更新のために、予習や復習をする時間を削っていたので。

３日坊主になってしまい申し訳ないのですが、これからの更新は不定期になってしまうと思います。

土曜や日曜、祝日になら更新する確率大なので、チェックしてみて下さい。

では、失礼致します。

２００７．９．１３　都神紗茅

10. He couldn't tell her the truth wi

澄んだ囀りが響き渡る、いつもの朝がまたやってきた。
新一はその景色を見る度に、罪悪感に苛まれていた。また一日、出発までのカウントが刻まれていくのを感じていたからだ。

寝ぼけ眼で窓の下を見てみると、彼女の姿が真っ先に目に入ってきた。今日も迎えに来てくれているんだと思うと、余計に心が傷んだ。
時計に目をやると、今から家を出てギリギリ遅刻にならないくらいの時間だった。

「おはよ、新一。ちゃんと朝ご飯食べた？」
「あー、食ってない。寝坊したし」
「どうせ、遅くまで小説でも読んでたんでしょ？」
「まぁな」

新一はこの世界の時計の秒針が一つ進むごとに、嘘を一つずつ身に纏っていった。それと共に、心臓から押し出された血液がじわりと全身に染み渡っていくのを感じた。

「なぁ蘭」
「ん？」

目の前にある笑顔に、新一は余計に真実を言い出せなくなってしまっていた。結果的にこの行動が狡くなるとは分かっているが、現実へまだ行きたくない自分がいた。

「今日の小テスト、範囲どこだっけ？」

「教科書の九十ページから九十五ページだけど。何か、新一らしくないね？」

変わらない笑顔で接する蘭から、思わず目を逸らした。今の自分と全く違っている彼女が、隣を歩いていることに違和感さえ感じた。

そんな新一に、蘭は静かに声をかけた。

「新一、やっぱりおかしいよ？」

「バーロ。何でもねーよ」

蘭の言葉をはね除けて、新一はさっさと先を歩いていってしまった。

そんな姿を、蘭はやり場のない思いを感じながら見ていた。

あっという間に、時間は過ぎていった。結局新一は蘭に告げる機会を見つけることが出来ず、家に帰ってきてしまった。

目の前にある彼女と繋がる機械を見つめながら、手を出したり引いたりしていた。

そんな中、それが着信を知らせてきた。軽く震える手で掴み、文章に目を通す。

『数学で分からないところがあるから、明日暇だったら教えて貰っ

ていい？』

少し悩んでから返信画面を開いた。

『午前中だけでも良いなら』

携帯を閉じたときに丁度、返信が来た。

『ありがとう。じゃあ、明日の朝九時くらいにそっちに行くね』

了解、とメールを打ち、ソファに突っ伏した。そんな姿でも、表情は真剣そのものであった。

真実を伝えるのがこんなにも苦しいなんて、思ってもみなかった。

秒針に視線の中心を合わせると、自分がそれの刻む時間（とき）に支配されているものだと実感した。

いつも見慣れているくせに、心情が違えばこんなに変わって見えるものなのだろうか？

その内、新一は睡魔に襲われて意識が遠退いた。

遠くから、人工的な音が新一の耳に侵入してきた。
両手を使い、だるい体を重力に逆らってソファから起き上がらせた。時計に目をやると、九時十七分であった。
前日のメールのやり取りを思い出してから、人工的な音の連続がチャイムだと分かった。

「これからシャワー浴びっから、中に入っててくれねーか？　鍵開けとくから」
『うん、分かった』

後頭部を掻きむしりながら、覚束ない足取りで風呂場へと向かっていった。

「で、Xにその数値を代入していけば……」
「あ！　そっか」
「んじゃ、問二も同じようにやってみな？」
「うん」

『大阪・昼間の繁華街で殺人事件、犯人逃走中』目に、新聞記事の文字が入ってきた。頭にはすぐあの喧(やかま)しい高校生探偵の姿が浮かんできた。
それはさておき、すぐ目の前にいる蘭が気になった。
もうすぐ日本(ここ)を発ち、外国へと向かうと言うのに、周りに広がる

景色は悲しいほど不変であった。
一時の迷いを断ち、新一は新聞を降ろして目の前の彼女に言葉を告げた。
「もし、仮に、の話だ」

10. He couldn't tell her the truth wi

サブタイトルの直訳：彼は不安なしに真実を告げられなかった

この話の最終部分が、第2話に繋がっていく形になります。

これからは作者自身が書くのを楽しみにしている、新一渡英編へと向かっていきます。

11. Leave Japan for London

荷造りのために蘭を先に帰して、自室に新一はこもっていた。
いなくなるのは何日かだけと言うことはあるまいと、大きなスーツケースを開き服やら色んなものを入れていた。今の新一には、後戻りの念はもはや微塵(みじん)もない。ただ、持っていくべきものをケースに詰める単純作業を繰り返すだけ。
新一は人間は一度決意すると吹っ切れてしまうんだな、と身を持って実感した。

「やべ、そろそろ行かねーとな」

時計に目をやってから、ケースを閉じ部屋を後にした。
ついさっき、新一は荷造りをしながらタクシーを呼んでおいた。電車でも行けなくはないが、もし蘭に今の姿を見られたら、どこに行くのかと問いつめられることになると考えていたからだ。

「成田空港の第一ターミナルまでお願いします」

「はい、分かりました」

日本を発つ時刻も、事情を知る博士や哀にさえも一切伝えていなかった。一回彼らの姿を見たら、躊躇ってしまうかもしれなかったから。
そして、新一は蘭に限らず、周りの人たち皆を巻き込みたくない

と思っていたのだ。
そんなことを思っていると、毛利探偵事務所の入っているビルが見えてきた。当然だが、その中の人の姿は一切見えない。一体、蘭はどんな表情であの中にいるのだろうか。そう思いながら、過ぎていく景色に向かって心中で言った。

（また待たせてごめん。でも、ちゃんと帰ってくるからよ）

蘭の表情を思い浮かべながら、新一は改めて自らの決意を強く固めた。
あっという間に、見慣れすぎた景色は新一から遠ざかっていった。

キャリーケースを転がしながら透明ガラスの自動ドアを通り抜けると、新一は様々な音が行き交う空間に包まれた。
新一は、人々が見上げている大きな電光掲示板に目を移した。

（えーっと、十三時十分発のロンドン行きのブリティッシュ・エアウェイズは……っと）

新一の乗る予定の飛行機は、あと少しで搭乗手続きが始まろうとしているところだった。
新一は近くに空いている席を見つけたので、とりあえずそこへ行こうとした時。後ろから、雑音を通り抜ける凛とした声が聞こえた。

「工藤君」

「え？」

声の根源へ目をやると、赤みのかかった茶髪を持つ小さな少女がいた。彼女は見かけの割にはあまりにも大人びていて、新一は、初めて彼女を見るものはその存在感に圧倒されるだろうと思っていた。
そんな少女こと灰原哀の後ろには、昔から顔馴染みの阿笠博士の姿もあった。
椅子から立ち上がり、歩いてくる二人に話しかけた。

「博士、灰原。オメーら、どうしてここに？」

「気づかなかったの？　博士の家からずっと見てたのよ。一応、見送るためにね。あなたは、私たちに出発する時間だとか何も教えたがらなかったから」

「そ、それは……」

電光掲示板を見上げていた時のとは全く違った表情で、新一はし

どろもどろとした。まさか
見張られているとは思っていなかった上、哀に返せる言葉を捜すのに苦労したから。
そんな様子を見て、哀は新一に構わず言った。

「彼は知り合いに頼ればいいと言っていた。でも、絶対に油断しちゃダメよ。もしかしたら、組織に関係する人物かもしれないんだから」

「……」

真剣な眼差しに戻って、新一は哀の言葉を心中で瞬間的に反芻した。目を閉じ、その言葉を全身に強く刻み込む。

『ただ今より、十三時十分発ロンドン行きＢＡ８の搭乗手続きを開始致します』

電子音が耳に入ってきて、新一はその方向へと体ごと振り向いた。それからキャリーケースの取っ手を手に取り、手荷物を抱えて二人に向かい言った。

「んじゃ、行ってくるよ」

これから、とてつもなく大きくて黒い存在に立ち向かう者のとは

思えないくらいの軽い微笑みで。それを見せさせられて、哀や博士の方が辛くなってきた。

そんな二人に背を向けて、新一はチェックインカウンターへと向かった。その時の表情は、さっき二人に向けたのとは全く違った表情で。

こうして新一は、日本を旅立った――――。

11．Leave Japan for London（後書き）

サブタイトルの直訳：日本からロンドンへ旅立つ

空港名や航空会社名は、実在のものを使わせていただきました。

追記。

今更ながらサブタイトルを若干変更。

２０１０．０８．０５

作者@都神紗茅

12. Encounter one person who will be

静寂に慣れてしまった新一の耳に、五月蝿(うるさ)いとしか言いようのない多種類の音たちが次から次へと入ってきた。飛行機が発着する際の音、発着情報や天候の状況を読み上げるアナウンス、一般人の談笑の塊(かたまり)。

新一の周りには、新一以外の日本人はほとんどいなかった。それ故(ゆえ)、たくさんの人間が行き交う中でも新一は目立っていた。しかし本人は、気にする余裕さえ入り込めないほどの緊張感に苛(さいな)まれていた。

キャリーケースの車輪と床がこすれあう音で自らを落ち着けながら、新一はメインのロビーを目指した。『待ち合わせ』の相手に会うために。

歩を進め、一番目立つであろう巨大な電光掲示板の目の前に来てみたものの、新一の瞳はそれらしき人物を捉えることができなかった。

(到着時間も伝えてもらったはず。他に目印になるようなもの……ないよな?)

手元の腕時計を見たが、それが刻むのは日本の時の流れだった。

そう言えば調整するのを忘れていたなと、電光掲示板に表示されているものに針を合わせようとした。

「あなたが工藤新一ね？」

無数の英語の中を寄り道せずに貫いた日本語を、新一の耳は一文字も聞き逃さなかった。

電光掲示板に張りついていた視線を、声の主へとゆっくり移した。

「君が？」

「そう。これから色々とよろしく」

新一が驚いたのは、その声の主の姿であった。軽く癖毛なのかふわりとしている黒髪に、メリハリのある顔立ち。しかもそれは、大人と言うよりは幼くも見えた。

「日本人じゃないよな？」

「純粋なイギリス人でもないけどね。祖父が日本人なのよ」

「なるほどな」

言われてみれば、イギリス人の中から日本人がさりげなく存在を

誇張している顔立ちに見えなくもないなと新一は思った。
では、彼女の年齢は？

「ちなみに高校生探偵のあなたと同い年」

神秘に満ちている瞳に心を読まれた気がして、新一は目を軽く見開いた。そんな一つの疑問が解決された瞬間に、別のそれが浮かんできた。

「じゃあ、あんたは一体」

「あんたじゃなくて、ラムって呼んで」

「ラム……？」

（ラムっつったら、サトウキビの絞り汁もしくは糖蜜（とうみつ）を発酵させて作る蒸留酒……じゃあ、やっぱりこの女は）

彼女が提示した名前に、新一の視覚は視界の歪みを微かに感じとった。機内で新一が思考を巡らせていたことの中心事項が、曖昧なものから確信へと変わったからだ。

「じゃあ、あんたは」

「あんたじゃなくてラムよ」

「ラムは、あいつのただの知り合いじゃないよな？」

確信をより地に固めるための新一の質問に、ああ、忘れていたなどと言った感じでラムは答えた。

「ええ。日本支部に配属されて、国内で彼の下で働いていたわ」

そうか、だから日本語が上手いのか。そう納得したのもつかの間、新一の脳はあっという間に負の感情で支配された。

（あれはぶっつぶしたとは言え、まだこいつは組織を抜けたわけじゃねーんだぞ。本当に信じてもいいのか？）

両手に生ぬるい汗が滲(にじ)んで、新一はキャリーケースの取っ手を強く握りしめた。さっきよりも強い緊張感が新一を襲った。　そんな新一とは対照的に、ラムは至って冷静と理性を保っていた。

「その他のことは話し出したらきりがないから、とりあえず彼が準備した家を案内するわね」

「じゅ……？」

「長期戦になるだろうからって、勝手に用意したのよ。どうせなら私の生家でも良かったんだけどね。彼、結構お節介なところもあるから」

それだけ言うとラムは新一に踵を返して、足早にその場を立ち去り始めた。

そのあとを、新一も追いかけた。

12. Encounter one person who will be

サブタイトルの直訳：良き相棒になるであろう、ある人物との出会い

13. Vicious circle

「ここよ」

新一がラムに案内されてやってきたところは、あの方提供の家。その見た目は、良くも悪くも他の民家と何も違っていなかった。

その家があるのはヒースロー空港から徒歩で十五分ほどの、大通りから一本入ったところであった。特別目立つわけでもなく、存在感が皆無と言うわけでもない不思議な場所だった。

しかし、夜は少し遠くに大通りの灯りが見えるだけで、その家の周辺は闇に包まれていた。

「安心して。ちゃんと部屋は分けてあるし、私達がここにいる間、彼は資金援助もしてくれるみたいだし」

そう言ってラムは庭の戸を開き、玄関へのレンガの道を歩き始めた。新一もそれに倣って敷地に足を踏み入れ、内側から戸を静かに閉めた。

歩きながら新一は、庭の中に車のガレージを見つけた。白いであろうシャッターは完璧には閉まっておらず、車の影がうすらと見えた。

「あの車も？」

新一の言葉にラムは一瞬立ち止まり、手に持っていたバッグから家の鍵を取り出して、

「えぇ。そうみたいね」

言い終えると同時に、ラムは鍵を抜き玄関の戸を開いた。そして手探りでスイッチを探し、とりあえず玄関の内外の灯りをともした。

「そうみたい、って……あの男はどうしてここまでしてくれんだよ？　家を用意したり、車を用意したりよ。いくらお節介っつったって、仮にもオレは少し前までオメーたちの敵だったんだぞ」

室内に入り、戸が完全に閉まったところで新一はたたみかけるようにラムに言った。彼女に聞いたところで自分を満たす答えが返ってくるわけがないと分かっていた。しかし、聞かずにはいられなかった。

ラムは少し考え込んでから、

「あなたを認めたんじゃない？　私もあなたの活躍を多少見たことあるけど、なかなかのものだって思ったし。あなたになら出来るんじゃないかって彼は思った……そう言えば、あなたも納得するでしょう」

「その言い方、まるでオメーが作り上げた話みてぇだな。第一、オレは完全にオメーを信用したわけじゃねぇから」

新一の喧嘩を売っているような言い草に、ラムは全く動揺することもなく落ち着いている。それが逆に新一の不信感を煽った。
新一の心臓の鼓動が、玄関と言う狭苦しい空間をあっという間に支配した。

「だから何？　彼に認められたとは言え、あなたには逃げ道を行く選択肢だってあったはずでしょう。あなたはどうしてここにいるのかしら」

「そ、それは」

言葉に詰まった新一に、ラムは新一に同い年とは思わせないほど重くのしかかるようなオーラを絡ませながら、更に続けた。

「じゃあ、質問を変えるけど、何故私があなたと行動しているか分かる？　本部には、一般人のあなた一人の力だけじゃ塵ほどの小さな証拠を手に入れることさえ不可能だからよ」

「……な、何が言いたいんだ？」

新一がオーラから這い出てやっと発した言葉は、滑稽なほどか弱くかすれていて、無力であった。そんな自分を初めて目にして、新一は気まずそうに視線を右往左往させていた。

「まず一つは、本部は日本支部なんかとは桁違いだってことよ。あなただって分かるでしょう？　日本支部を潰せたからって舞い上がってると、身の破滅に繋がるってこと」

さらさらと重力に任せて落ちていく砂時計の砂のように、ラムは言葉を口にして行った。全く感情的にはなっていなかったが、その一つひとつは新一の心に突き刺さった。

「そしてもう一つ。それは、日本支部にいたメンバーの中で、私だけがかつて本部に所属していた経験があったからよ」

ラムの言葉に、新一は目を大きく見開いた。言いたいことがありすぎて、喉の辺りに詰まって余計に言えなくなっていた。その栓にまた一つ、また一つと脳から別の言葉が浮かんできた。そのようなキリがない悪循環に新一はさいなまれていた。

13. Vicious circle（後書き）

サブタイトルの直訳：悪循環

14. Eagerness and calmness

両足が地に吸い寄せられて身動き一つさえ全くしない新一を見かねて、ラムは一言だけ発した。

「食事は、もう機内で済ませたわよね？　明日は本部があった場所に行く予定だから、ちゃんと休んでおいて」

ただでさえ混乱中の新一にラムは容赦なく、別の、深い意味を含んだ言葉を放り投げた。

新一にとって、ラムは、彼女が発する言葉や表情から立ち振舞いまでも――もはや、全てと言っても過言ではなかった――が、何もかもが難解だった。糸の絡まりをやっとのことで外しても、すぐにまた隣に別の絡まりを見つけてしまったような。

悪循環から抜け出たフリをして、冷静を演じる準備を整えて、新一はやっとのことでラムに問うた。

「本部が『あった』場所？　『あった』って、どう言う意味だよ」

「簡単に言えば、私が三年前に働いてた場所ってところ。過去形なのは、今でもそれがそこにあるとは限らないからよ」

そうか、とそれだけ呟くと、新一は落ち着きを微かに取り戻したのか黙り込んだ。

ラムはそんな新一を一瞥すると階段に片足を掛けながら、

「階段から向かって右の部屋は私が使うから、あなたは左の部屋を使って。じゃあ、おやすみなさい」

「あぁ」

新一はまだまだラムに聞きたいことがあったが、彼女から発せられているオーラを感じ取ったため軽くうなずくだけに留めた。そんなラムは黒髪をなびかせながらそっぽを向き、階段を上がっていった。

ラムの姿が見えなくなって数秒、新一の耳には扉の開閉音が届いた。もう上へ行っても良いかなと、両手の巨大な荷物を抱えながらラムのあとに続いた。

中古の家なのか、新一が床を踏むと軽く軋(きし)む音がする。うぐいすばりかと思いながらも、密かに面白がりながら部屋へと向かっていった。

「ラム。あのさ、色々聞きたいことがあるんだけどよ」
「どうぞ。あなたが望む答えが返ってくるとは限らないけどね」

明くる日、新一は昨日生まれてきた数々の質問を消費するためにラムにそう言った。
意外と自らを隠そうとする素振りを見せなかった彼女に、新一の表情から微かに戸惑いが漏れた。それを興味のないものと誤魔化して、続けた。

「ラムは、何で日本支部に異動になったんだ？」

新一の質問に全く動じることもなく、ラムは瞬きを数回してから答えた。その表情からは、実際そうではないだろうが、小馬鹿にしたような余裕さえ感じられた。
ラムの顔立ちは、幼さが残るものの、さっぱりした美人の部類に入るものであった。それもあるのかと新一は勝手に判断した。

「私が本部にいたのは、十四の時から二年程。ボスが幹部に言伝てしたらしいのよ。来週から日本支部へ異動しろってね」

腕組みをし、足を組んで何でもない話のようにさらりとラムは言

ってみせた。新一の瞳に映るその表情からは、どこか懐かしむような感情も見え隠れしていた。彼女の言葉の中にあったある単語に大きく反応した新一とは、全く正反対なものであった。

「オメー、ボスについて何か知らないか？　どんな些細なことでもいいから」

冷静を演じるのにも疲れた。焦りきって息が荒くなったそんな新一を、ラムはきつくて冷ややかな視線で貫く。

「何も知らないわよ。会ったことも見たことも声を聞いたこともないんだから」

ラムの言葉に含まれた氷のような感情で、やっと新一は気づいた。思わず乗り出してしまっていた体を椅子に引き戻して、一息つく。視線のやり場に困りそれをうろいろさせている間、一瞬視界に入った銀色のフォークを捉えた。

「きょ」

「きょ？」

「今日は、本部があった場所に行くんだよな？」

「ええ。まぁ期待はしないでね」

相変わらずのさっぱりしたラムの言葉を、新一は心中で反芻していた。

14. Eagerness and calmness（後書き）

サブタイトルの直訳：熱望と冷静

これは、あの二人のことですよ～。

15. Clue

『本部があった』場所と言うのは、一軒家の最寄り駅から出ているある電車に揺られて三十分の駅にあると、ラムは家の鍵をかけた瞬間に言った。ちなみにその最寄り駅は、一軒家から数分歩いたところにあった。

第一の目的地までの道のり、新一は喉の奥に押し込めざるをえなかった質問をラムに投げかけた。

「あともう一つだけ聞く。さっきのラムの話だと、日本支部にいたのはせいぜい一年だろ？　それにしては日本語上手いよな」

新一とラムの間を、風が躊躇(ためら)いがちに流れていった。

ラムの声を新一の耳が捕らえることは出来なかった。出来るはずもなかった。そんな彼らの周りには、他の人間の姿は全くなかった。

意図的に視線を反発させていた新一は、さすがにまずいことを言ったのかと、ラムの顔を一瞥した。すると、違う意味で驚いた。

ラム自身、別に怒っているわけではなかった。むしろその表情は、昨日新一が目にすることもない類(たぐい)のものであった。その類というのは、ラムが漂わせていた負の感情と、正反対なほうのことだ。

「昔は家族で祖父の実家によく遊びに行ったのよ。たまに祖父もこっちに来てくれたんだけどね。その祖父は父方なんだけど……母方の祖父母も母自身も、皆、日本が好きだったから。祖父と会話してくうちに自然と覚えたんじゃないかって思ってる」

ラムの柔らかい言葉と表情で、新一は初めて彼女の透明な見えない殻の内側に触れられた気がした。
昨日は正直、新一にはこれから共にやっていけるのかと言う心配があった。しかしそれらはほとんどが他の気持ちに変化した気がした。確信はなかったけれど。
そんな新一に向かって、祖父の話題にこれ以上の詮索を防ぐかのようにラムが口を挟んだ。

「本部があった場所は最寄り駅から徒歩で数分。駅の周りに彼らの仲間がいるかもしれないから、口と行動には十分注意して」

「あぁ。分かってる」

新一がラムの視線の先を辿ると、たくさんの人であふれかえる、現在住む家の最寄り駅の看板と言う名の終着点があった。
さっきまでの穏やかな表情はどこへやら、新一の目に映るラムはいつの間にか他人をはねつける凛々しさを取り戻していた。
改めて新一も、汗ばんだ両手を握りしめて、緩みかけていた緊張感を全身に行き渡らせた。

「ほ、本当にこの駅なのか？」

「ええ」

すっとんきょうな声を上げたあと、新一はそれきり黙り込んで感覚を視覚に集中させた。

『本部があった場所』の最寄り駅の周りは、お世辞にも都会とは言えなかった。駅の外に出てまず新一の目に入ってきたのは、田園風景。その中に建物が点在していた。

「三年前と何も変わっていないように見えるわ」

ラムの独り言に新一は更に混乱した。こんな場所にあるとは予想していなかったのだ。しかし、すぐにその考えを脳内から消し去り、独り言に独り言で返した。

「まぁ、裏の裏をかくっていう手もあるしな」

新一は、そう呟いた瞬間、何か恐ろしいものを見たかの如く表情が歪んだラムの姿が目に入った。真っ直ぐ前を見つめたまま、何かを考え込んでいるようだった。

するとラムは何を思ったのか、自分の左側にあった新一の腕を無理矢理に取り、両手で抱きしめた。

「お、おい？　何を」

「良いから黙って。このまま真っ直ぐ歩いて」

静かながら勢いのあるラムの声に気圧されて、新一は言われた通りに歩き始めた。

新一の足取りがどこかぎこちないまま、二人は前から歩いてきた一人の男とすれ違った。

その男はスーツを身に纏(まと)い、黒い鞄(かばん)を片手に提げ、革靴とアスファルトの接触しあう音を奏でながら歩いていた。顔立ちから、どうやらイギリス人のようだと新一は判断した。

男が駅の中に消えていったのを確認して、ラムは静かに新一の腕を解放した。そうしたあとも、男が消えていった入り口を見据えていた。

「どうしたんだ？」

新一の問いに、ラムは声を潜めて答えた。

「彼の顔、見たことあるわ。本部の中でね」

「……ってことは」

そういうこと。ラムは、音のない言葉を新一に示した。

15．Clue（後書き）

サブタイトルの直訳：手がかり

16. Enter the place that is dangerous

「じゃあ行きましょうか？」

ラムのその一声で、新一は地に埋もれかけていた足を踏み出すことができた。その地の表面に自らの足が触れていることを確かめながら、一歩ずつ進んでいく。

そんな新一を見かねて、ラムが声をかけた。

「怖い？」

「んなワケねーだろ。で、その場所はどっちの方向なんだ？」

「……あっちよ」

ラムに小馬鹿にされたのだと勘違いした新一は、微かに怒りを絡めた言葉を返した。それから、脇目もふらずずんずんと歩き出した。

そんな新一のあとを、何を思ったのかラムは微笑を浮かべて付いていった。あからさまに冷静を失ったように見えた背中が、とても頼もしく思えた。

「ここよ」

ラムが指さした先には、一つの建物があった。外装からしてまぁまぁ新しそうで、たまにところどころ塗料が剥げている場所もあったが、そこはあまり気にならない程だ。新一には、見かけからして製薬会社か何かの地方工場に思えた。

「誰かいるのか？」

「ここからじゃ分からない。でも、彼があの駅にいたのはここと関連があるとしか思えないわ。この町には、ここ以外、組織に関係する物事は皆無なんだから」

建物の門周辺にある植え込みの影から様子を窺(うかが)うラムが、隣の新一に小声で言った。いつ誰がここから出てくるのか全く分からないからだ。周りをまた見渡してから更に続けた。

「さっき駅にいたのは、本部でも権力が強かった『アニゼット』って言うコードネームを持った人物よ。さっきは何とか誤魔化(ごまか)せたから良かったけど、彼は自らの仲間さえも躊躇(ためら)いなく殺害するわ。私もかつてその現場を見たことがあったもの」

（※アニゼット……リキュールの一種）

「アニゼット……か」

新一は、ラムの言葉の中にあった重要人物の名を、全身にしっかりと刻み込んだ。

そんな矢先、ラムが突然立ち上がり、門の近くまでかけていった。その様子は、音も立てず、新一の制止も始まらぬ前に動いたことから、まるで風のようだった。

「オメー、何を」

ラムは、やっと出た新一の弱々しい制止も全く聞くことなく、門の向こう側を見つめた。それから少ししてから振り返り、言葉を発した。

「門に鍵をかけたのは、多分アニゼットよ。だったら大丈夫。もう誰もいないはずだから、あなたも来て平気よ」

「……え？」

「言ったでしょう？　アニゼットは強い権力を持ってるって。彼は本部の中でも稀（まれ）な、ボスと繋がってる人物よ。ここをあえて灰にしないで鍵をかけたのも、ボスの直接命令かもしれないから」

アニゼットはボスと繋がる人物――その響きに新一は心が乱れた

が、ラムの忠告を思い出し、すぐに自分を引き止めた。

「でも、何でそれだけで誰もいないって」

「本部の場所はよく変わったのよ。ボスがやたらと用心深いから。私がいた時だけでも二、三回は変わったわ。でも建物の中には膨大な資料があるから、それを移動させるのに時間がかかるの。その手配にもね」

「なるほど？　今のこの鍵がかかってるのは、その手配をするために一旦アニゼットがここから離れた空白の時間ってワケだな」

植え込みの後ろから、辺りを見渡しながら新一は出てきた。やっぱり誰もいないようだ。気配さえ皆無だった。

ラムはそんな新一を一瞥してからまた門の向こうに視線をやり、付け加えるように言った。

「簡単な手配さえ本人の口から聞かないと嫌な人らしいからね。それが裏目に出てるワケよ」

それからラムは自らがスカートをはいていることを全く気にしない姿で、それでも無駄な動き一つなく門をよじ登ると、向こう側に降り立った。

新一もその後に続いて門を飛び越えた。

「くどいようだけど、これで大丈夫なのか？　もしかしたら見張りがいるかもしれねーじゃねーか」

本当に新一がくどいのかただ単に説明が面倒なのか、ラムはその言葉をさらりと受け流して、足音一つ立てずに建物の入り口へと向かっていった。

新一の瞳に映るラムの姿は、大胆でありながらも慎重な行動をしているのだと感じさせた。また、言葉はないものの、警戒を促していたようにも見えた。

（なるほど、物音一つ立てずにってことか）

16. Enter the place that is dangerous

サブタイトルの直訳：危険区域への侵入

17．Emergency

やっぱり何も変わってない。私についてくれば資料室にちゃんと着くから。ラムは自らの携帯の新規メール作成画面で、新一にそう伝えた。

その新一は滑稽な程に慎重に一歩ずつ進んでいて、ラムの後ろから周りの景色を眺めながらうなずいた。しかしそれくらいが丁度いいと思っていたラムは、何も言わずに新一を一瞥してからまた歩み出した。

とにかく白い。『黒の』イメージが強い組織の本部にしては、と新一は自らの目を疑った。

元本部の建物内は、壁から床、天井までどこもかしこも真っ白だった。無駄な汚れさえ一切なかった。それ故新一は、あまりに白すぎることに対する居心地の悪さを感じた。

（白すぎて、逆に気分が悪(わり)ぃな）

そんな中、急にラムが新一の口を右手で押さえた。　その新一の目に映るラムの顔つきは、正に闇にまみれて生きる者のであった。背景にそぐわないこともあり、余計にそう思えた。

しかし、この状況は、そのような無駄さえ与えてくれないようなものになりつつあった。ラムは何も言おうとしなかった。

（どうして？　この中にはもう誰もいないはずなのに）

ラムが何も言おうとしなかったのは、かすかではあったが物音を聞き取ったからであった。
この建物は、風は一切入らないような構造になっていた。また、そのラムが聞き取った音は、どこかの遠くの廊下を歩く何者かの足音だったのだ。
それは新一には届かなかったが、組織の中で活動していくなかで、常に耳を澄ませていたラムには確かに届いた。

ラムは新一の口に手を当てたまま、その物音から離れていくように、出入口へと向かい始めた。
そんなラムに、当然新一は驚きを隠せなかった。

（な、何だよ？　ラムの奴、急に。まさか、誰かいたんじゃ）

ラムの行動を確かに当たっているものだと思った新一は、急ぐ彼女に歩調を合わせた。

新一は軽く息が上がったのを抑えつつ、建物に侵入する前に隠れていた植え込みの後ろに潜んだ。
正反対の植え込みの裏にはラムがいた。門を越えた際に、新一と二手に分かれたからだ。この時もまだ、警戒した表情を浮かべていた。

しばらくしてから、ラムは新一の何か言いたそうな視線に漸(ようや)く気づいた。
それからラムは表情を緩めて、携帯を取り出し、メールを一通打った。数秒置いてから、新一の携帯が震えて着信を知らせた。

『さっき私たちのいたところに向かってくる足音が聞こえたの。その人は私たちには気づかなかったみたいだけど、見つかったら確実に消されるから早めに逃げてきたってわけ』

しばらく考え込んでから、新一も返信を打った。

『そうだったのか。だったらここからもすぐに離れた方がいいんじゃないのか？　そいつがここを出てくる時にもし見つかったらやべぇんだしよ』

新一の文面に目を通すと、ラムはたった一行のメールを返した。

『アニゼットが来るかもしれない』

ラムが言いたかったことがその一文に集約されていて、新一は持っていた携帯電話を折りたたんだ。
実際は、ラムが面倒なだけだったのかどうなのかは新一には全く分からなかった。

そんな中――ある一つの影が姿を現した。夕日に照らされていたため、その顔はよく見えなかった。それでもラムだけは、その人が遠くにいた時でもすぐにその正体に気づいた。

アニゼット。先程、ラムと新一が駅ですれ違った男だった。

アニゼットはゆっくりと足を前に踏み出していった。駅にいた時と同じ、いや、それよりも気の抜けたような歩きかたで。しかし、それは新一の目に映った彼の姿であって、一方のラムは、息を殺しながらその姿を見ていた。

アニゼットが門、それに加えて新一とラムから数メートルの距離まで歩んできた、その時。
新一とラムの隠れている植え込みからは丁度死角になっていた門から、アニゼットとは違う他の男の影が現れた。
そしてその男は、アニゼットと距離を縮めると、深く一礼した。男の顔立ちは、この国――英国にはどこにでもいそうな普通なものだった。

（見覚えのない顔だわ。でもアニゼットと会話できるのは、立場が

上じゃないと無理。もしかしたら、私みたいな異動してきた人間かも。元々いた支部で権力が高くて、なおかつその実力を認められて）

ラムがそんなことを思っていた中、アニゼットとその男の会話が始まった。

17. Emergency（後書き）

サブタイトルの直訳：緊急事態

18. The key which clears the way

「Was there any abnormality?」
（何か異常は見つかったか？）

「No, there was nothing」
（いいえ、何もありませんでした）

アニゼットはその男の両目を、柔らかい表情のまま食い入るように見た。
彼が元から目鼻立ちのすっきりしている紳士的な顔立ちであるために、事情を何も知らない人間から見れば違和感は皆無だ。しかしその事情を知る周りの人間、特にラムはアニゼットのそんな姿に底知れぬ恐怖を感じていた。

（もしあの部下が嘘をついているにも関わらず、それを隠そうとしていたら。そしてその嘘がアニゼットに気づかれたら――確実に殺される。アニゼットのあの顔は、人を殺す時のだもの）

ラムが組織の本部にいた際に、アニゼットのその表情を幾度と見たことがあった。組織に入ってすぐにその実力を認められ、高い地位の者とよく仕事をしていたからであった。この間接的に再会した日まで、その表情を忘れたくても忘れることができなかった。
アニゼットは数分間男の顔を見つめたあと、数歩下がって煙草の箱を取り出した。その中から一本抜き取って口にくわえた時、男が慌ててライターを手に駆け寄った。

彼は火の点いた煙草を口から離し、煙を吐き出しながら一言だけ呟いた。

「Ｉ　ｕｎｄｅｒｓｔｏｏｄ　ｉｔ」
（分かった）

部下の男は銀色のライターを仕舞い込み、アニゼットが何かを言い出してくれないかと思いながら、そこに突っ立ったままでいた。そんな男の様子に彼は意味ありげな笑みをさりげなく浮かべて、やれやれと言うように話し始めた。

「Ｔｈｅｎ，ｈｏｗ　ａｂｏｕｔ　ｔｈｅ　ｗａｙ　ｔｏ　ｔｈｅ　ａｂｂｅｙ？」
（では、修道院への道はどうだったか？）

アニゼットの言葉に、新一は我が耳を疑った。突発的に何を言い出したのか、この人はと。しかし探偵の性（さが）が働いたのか、その言葉が何かを示しているのではないかとも思い始めた。部下の男から言葉が返ってくるのを待ちつつ、頭をフル回転させて考えた。

静かに考え込む新一を尻目に、ラムは何かを確信して、恐ろしいものを見た時のような表情を浮かべた。それでもまだ彼女の中で曖昧になっている部分はあったため、新一と同じく部下の男の言葉を待った。

そんな新一とラムの気持ちに気づくはずもなく、彼はもったいぶるように一言だけ言った。

「Ｉｔ　ｗａｓ　ｌｏｎｇ　ａｎｄ　ｗｉｎｄｉｎｇ」
（それは、長くて曲がりくねっていましたよ）

「Ｉ　ｓｅｅ．　ｙｏｕ　ｍａｙ　ｃｏｍｅ　ｂａｃｋ」
（分かった。では、戻っていいぞ）

アニゼットの言葉に、部下の男は安堵した表情を浮かべた。その様子に深く意味を探ることもなく、吸い終えたタバコを丁寧に携帯灰皿に仕舞いこむと、アニゼットはその場を去っていった。彼がいなくなってから数分経った後、部下の男はただの男に戻って、彼の行った道と同じところへ向かっていった。その姿はすぐに見えなくなった。

「何だ？　修道院への道が長くて曲がりくねっていたって」

痺れている足を引きずって、新一は物陰から出て来た。そうしてからすぐに、物事を深く考えている時によくする、あごに手をあてたポーズのまま壁によりかかった。そんな彼の目の前を、ラムは全く触れることなくあっさりと通り過ぎていった。

「まさかオメー、分かったのか？　あれが何を示すのか」

後ろから聞こえてきた新一の声に、ラムは静かに振り向いた。それと同時に吹いてきた、暖かくて柔らかな風が彼女の髪を一房さら

っていった。
その綺麗な姿と対比する彼女の表情の険しさに、彼女を振り向かせた原因を作った新一自身が一番驚いた。思わずあごにあてていた手を降ろしてしまった。

「えぇ。そこが組織に繋がる場所のことだって。決めつけるのはまだ早いけれど」

「そこ？」

「修道院への道って言うのは『Ａｂｂｅｙ Ｒｏａｄ』で、長くて曲がりくねったは『Ｔｈｅ Ｌｏｎｇ ａｎｄ Ｗｉｎｄｉｎｇ Ｒｏａｄ』よ」

ラムはさらりとそう言ってのけた。彼女の恐怖に歪みかけている表情とは裏腹に堂々としている態度に、新一は余計に思考回路を回転させることになった。
しばらく新一をそのままに放っておいた後、ラムは静かに話し始めた。

「両方ともビートルズの作品よ。きっと合言葉なんでしょうね。偽者かどうか見分けるための。しかも彼は戻っていい、と言っていた。もしかしたらその戻る先って組織の本部かもしれないわね」

「じゃあ、その場所ってどこになるんだ？」

新一の言葉が、空気の中に姿を消した。それから一呼吸置いて、ラムは告げた。

「ビートルズが結成された都市・リヴァプール」

18. The key which clears the way（後書き）

サブタイトルの訳：道を開く鍵

長らく待たせてしまい申し訳ありませんでした。これからは最低でも2週間に1話くらいのペースで更新して行こうと思います。

文中に出てくる、アニゼット氏とその部下の話している英語は間違っている可能性が高いです。もし何か気づいたら、メッセージ欄からこっそりお知らせして下さると助かります。

19．Undemonstrative girl

暖かな風と共に、新一とラムは本部の跡地を後にした。とても貴重な収穫を得ることが出来たことから、これ以上そこにいる必要がなくなったからだ。

次へ進むべき場所ははっきりしているので、わざわざ急ぐ必要はないとラムは判断した。むやみやたらに一日で済まそうとすると、焦りと疲れと自信過剰が人を油断させると思っていたからだった。また、その時点で既に夕日が水平線に吸収されつつもあったからだ。

彼女の的確な判断に、新一も賛成した。

二人は『あの方』が準備した家に戻り、玄関の鍵を閉めてから会話を始めた。そのきっかけを作ったのは新一の方であった。

「アイツは、組織の本部はロンドンにあるって言ってた。なのに、何であそこはもぬけの殻になってたんだ？」

「各支部長が本部に出向くことは絶対にないって聞いたことがあるわ。各支部と本部との連絡手段はメールのみともね。だから、本部がどの都市のどこに移りましたってすぐに報告する必要もないんじゃないかしら」

新一の脳内には、日本支部を追いつめた時の情景がぼんやりと浮かんでいた。その中には『支部長』もいた。椅子に腰かけ、焦点の定まっていないそんな彼にラムは言い放った。

彼女のその言葉に、新一は我に返ってまたあごに手をあてた。

「じゃあ……本部の場所っつっても、アイツはそれがどの都市にあるかってことしか聞いてなかったのか？」

「多分ね」

まぁ、本当のことは本人に訊いてみないと分からないけれど。ラムはそう言いながら、新一と向かい合うように椅子に座った。比較的新しそうに見えるそれは、まだ若いままの軋(きし)む音を立てた。そこから彼女がゆっくりと順を追って腕を組むと、あごから手を離した新一が、話題を変えるために言葉を発した。

「にしても、良くあの暗号がビートルズに関係することだって分かったな？」

「あぁ、あれね」

ラムの口調が、一度だけ見せた柔らかいものに再度変わった。それだけではなくて、新一には表情も少しばかり緩んだように見えた。

「祖父はかつてこっちに住んでいたみたいなのよ。曾祖父が亡くな

った時に、日本にある実家に戻ったって聞いたわ。こっちにいた時は、ビートルズを好んで聴いていたそうよ。私が祖父の実家へ行った時には、いつも聴かされた。だから覚えていたの。今話してる日本語と合わせてね。まぁ……日本語は、日本支部にいる間にほとんど完璧に話せるようになったのだけれど」

ラムの昔の思い出を懐かしむかのような優しい表情に、新一は、自分のずっと連れていた重苦しい足枷(あしかせ)が少しだけ軽くなったのを感じた。

その勢いもあって、彼は思わず言葉を挟んだ。

「じゃあ、その人――ラムのお祖父(じい)さんは、今どうしているんだ？」

その瞬間に、ラムは表情を曇らせた。言葉の主が、言ってはいけなかったものだと自覚した時にはもう遅かった。

私が、とラムは話し始めた。まるで、暇を持て余すような何気ない会話を始める時のように。

「組織の人間になってからは、本当の私を知る人とは一切連絡を取ってないわ」

ブルーに染まった寂しげな横顔が、新一の視界の中心に浮かんだ。それはまるで蜃気楼だった。天井に吊るされている飾り気のない照明が、鮮やかにその様子を映し出していた。その割に、彼女はどこかはっきりとしない姿でそこにいた。その状況の中にいて、彼は自

然に言葉と動作を失ってしまった。
秒針が音を立てずに九十度移動したところで、その場に変化が訪れた。新一が決意して言葉を準備したのだ。

「わりぃ。わざとじゃ」

「まだそんなに遅い時間ではないけれど、今日はもうお互いに休むべきじゃないかしら。あなたも疲れたでしょう？　過酷なプレッシャーにずっと苛まれた状況にいたから。十分に休まないと、これから色々と苦労するわよ。まだあなたはこっちに来てから二日しか経っていない訳でしょう。私としてもあなたにいきなり体調を崩されたら困るのよ。……そう言う訳で、夕食は各自取ることにしましょう。じゃあ、また明日」

ラムは言葉の塊を身に纏(まと)って、困惑する新一をはね除けた。そして彼の返答する隙を逃さぬように、早足でこの部屋を後にした。それから、追いかけることさえ許さないように、わざと足音を立てて階段を駆け上った。
座ったまま、新一は彼女の音を聞いていた。彼は別に彼女からの言葉も聞いていないし、姿も良く見ている訳ではない。それでも、彼女が無理に強がっていることがはっきり分かった。そして、彼女が組織にいることには何か深い理由があるのではないかとも。
この日、新一は独りでしばらく思考に耽(ふけ)ってみた。しかし、そうしたところで、彼女が抱えているものの外側を見つけることさえ出来なかった。

19. Undemonstrative girl（後書き）

サブタイトルの直訳：感情を表に出したがらない少女

20．Blackout

「今、九時だけど。分かっているのかしら？」

ラムの声は、扉ごしにも関わらずある部屋の隅々まで染み渡った。その部屋とは、新一の自室である。

ベッドの上にいた部屋の持ち主は、ラムの声で目を覚ました。そして、窓から射し込んでいる、白と暖色系の混じった光に気づいた。

「やべっ、寝過ぎた！」

部屋の持ち主こと新一はさっとベッドから起き上がり、頭をガリガリと掻いた。そうしながら、前日の記憶を再生した。彼は、改めてラムについて色々と考え込んでいる内に、眠ってしまっていた。どこまで考えたかと言うことと、自分が何時に寝たかについての情報はなくしていた。

再生が終了したため、彼は急いで着替えを始めた。

「遅くまで調べ物でもしていたのかしら？」

お前について、例えば何で組織に入ったのかとか、色々考えてた。そんなことが言える筈（はず）もなく、新一は、疲れていたから寝過ぎたとだけ扉に向かって言った。声での返答はなかったが、代わりに小さな足音が聞こえてきた。

疑わなかったのか。足音が遠ざかって完全に聞こえなくなってから、新一はほっと一息をついた。
そんな彼は、ラムの全てに関することに悪いと言うことだけの理由は存在しないと言う、漠然とした確信だけはしていた。そして、それらに触れてはいけないと言うことも。
無理に聞いたところで、彼女を傷つけるだけだ。そう自分に言い聞かせたところで、新一はちょうど着替え終わった。

優しい食材の香りに焦りつつ、新一は階段を駆け下りた。
ドアを開けたその先には、ラムの姿はなかった。机の上に、作りたてであろう料理が並んでいるだけだった。
それに少し戸惑いつつ、彼は机に近づいた。それとともに、料理たちの隣に置かれているメモを発見した。

「『用事があるから出かけるわ。あと、たまにはあなたも食事を作ってくれる？』か。ふーん」

音読したメモを元の位置に戻して、新一は食事を始めた。
そんな中、彼はふと思い出した。組織に関する場所が、リヴァプールと言う都市にあることを。

「特にすることもないし、ラムだって出かけてていないし」

新一の独り言は、朝食の風景に静かに溶け込んでいった。

その約三時間後、新一の姿は別の場所にあった。それは、リヴァプール・ライム・ストリート駅である。現代的で開放的な内装に見とれつつ、彼は出口へ向かって歩いた。

そんな彼は、濃い茶色で軽い材質のジャケットに新雪に似た白さを持ったシャツを着て、黒いネクタイを緩めて付けていた。それと濃紺のジーパン、そしてネクタイと同じ黒色であるスニーカーを履いていた。

ネルソン卿通り（※Ｌｏｒｄ　Ｎｅｌｓｏｎ　Ｓｔｒｅｅｔ）に出てから、一旦新一は立ち止まった。そして、自らの腕時計に目をやった。

「ロンドンから大体二時間半。てか、こんなところに本当にあんのか？」

そんな彼の目の前には、たくさんの人通りがあった。皆、それぞれの方向へと歩いていた。

立ち止まっていた新一の視界に、一際（ひときわ）目立つ建物が入ってきた。彼は思わず腕時計から目を離して、そこへと向かった。

ネルソン卿通りの一本隣にある狭いそれに、入り口はあった。人通りも、先程新一がいたところとはうってかわって少なかった。
青銅で頑丈そうな門の向こうには、おとぎ話に出てくる城に似た建物があった。しかし中の様子は生け垣で見えず、この場所だけが静寂に包まれていた。
そして、その門の両隣には灰色の塀が立っていた。この場所に立てられてから長く時間が経っているように見えたそれには、一枚のプレートが付いていた。金色のそれには、アルファベットが何文字か並べられていた。

「ＤＦＣＣ……って、あの有名な車メーカーの？　そういや、本社はこの都市にあるんだったな」

この会社の年間販売台数は、世界全体で常に一、二位を争うほどである。
それなら本社がこんなに豪華なのも頷けるなと、新一は思いつつ建物を全体的に眺めていた。

そんな中、彼は、自分の腰辺りに冷たくて固いものがあてられていることに気づいた。
透明の緊張感が、彼の心臓の鼓動を早めた。顔だけを少し右に動かしたところで、彼は状況を瞬時に理解した。

「Ｂｅ　ｑｕｉｅｔ」

（静かにして下さい）

「……Ｗｈａｔ　ａｒｅ　ｙｏｕ　ｔｈｉｎｋｉｎｇ？」

（……何を考えているんだ？）

新一は、その言葉を搾り出すように出した。後ろに立つ男は、何も言わずに彼の右手にあるもの――拳銃を、より強く新一に押し付けた。

その男は、サングラスをかけている金髪の外国人だった。全身黒のスーツを身にまとっていて、身長は新一よりも二十センチは高かった。そして、きつい香水をつけていた。

「Ｃｏｍｅ　ｗｉｔｈ　ｍｅ，　ａｔｔａｃｈｉｎｇ　ｔｈｉｓ　ｂｌｉｎｄｆｏｌｄ」

（この目隠しをつけて、私に付いて来てください）

その言葉を聞いてから、新一は汗ばむ手で目隠しを受け取った。少し間を置いてから、震える両手で、綺麗に色づいていた世界を暗闇にした。

20．Ｂｌａｃｋｏｕｔ（後書き）

サブタイトルの訳：ブラックアウト

ここでの意味：舞台の暗転

・気づいたら、
あんなことを言ったくせに一ヶ月放置していました……ｏｒｚ　自業自得としか言いようがありませんが、さすがに三つの連載を並行して更新していくのはきついです（汗）

・今回のサブタイトルは、
私にしては珍しく悩みませんでした。
サブタイトルと言えば……
ちょっとしたお遊びですが、全て英語に統一している理由もちゃんとあります。

・余談ですが、
ＤＦＣＣの正式名称は『Ｄｉｓｔａｎｃｅ　Ｆｏｒ　Ｃａｒｓ　Ｃｏｍｐａｎｙ』です。本編では、特に必要ないかなと判断し割愛させていただきました。
リヴァプール、リヴァプール・ライム・ストリート駅、ネルソン卿通りは実在しますが、この会社は架空のものです。

21. Into the light

新一は外国人の男に連れられて、ＤＦＣＣ本社の中を歩かされた。目隠しをさせられていたため、彼には二つの足音が冷たく響いていたことしか分からなかった。しかしその響きが短かったことから、歩いている通路はそんなに広くないだろうと判断した。

男は、曲がり角を迎える度にどちらへ行くかいちいち教えた。拳銃はあてられているままだったが、言葉遣いは至って丁寧であった。

二つのどちらに嘱するか分からない、曖昧な優しさが余計に新一を焦らせた。

どのくらい時間が経ったかは分からなかったが、急に新一は立ち止まらされた。それからすぐに、重厚そうな扉をノックする音が聞こえてきた。

「Ｍａｙ　Ｉ　ｃｏｍｅ　ｉｎ？」

（失礼します）

「Ｏｋ」

（どうぞ）

外国人の声から遅れて別の男のそれが聞こえた。嗄(しわが)れている声質からして、年老いているのだろうと容易に想像できた。

続いて、扉の開く音が聞こえてきた。数秒空けてから、外国人の男は新一の体を軽く押した。

一歩前に出た時、新一は靴越しにカーペットの質感をはっきりと感じ取った。それまで足の裏と接していた面とは、明らかに違う柔らかさと厚さを。

「窮屈なら目隠しを外しても構わないよ」

久しぶりに聞いた日本語に、新一は思わず目隠しの下にある目を見開いた。それから男の言葉に沿うように、視界に無数の光を誘い込んだ。

光の中に居たのは、一人の小さな老人だった。豪華な箪笥(たんす)やシャンデリアの中に埋もれるように、真っ黒な椅子に腰かけていた。彼の目の前にある、漆塗りの巨大な机のせいで彼の足下は丁度見えなかった。

「あなたは、組織の」

「工藤新一君だね？　君の活躍は下の者から聞いているよ。高校生で探偵をしているのだとね」

老人は、柔和な笑顔にぴったり合う語調で言葉を示した。しかし、新一はそのような態度ではいられなかった。全身を駆使しても掬(すく)いきれない程の湧き出てくる疑問に押し潰されそうだったのだ。

「そうです。ところで、あなたは……日本人ですよね」

新一が声を振り絞ってやっと出したのは、初歩的で遠回しな質問だった。

「私はね、君に実際に会ってみたいとずっと思っていたんだ」

そんな彼の質問に一切触れることなく、老人は更に続けた。あからさまに困惑する彼の瞳をじっと見つめながら。

「こっちの生活には慣れたかい」

「え？　ま、まぁ」

この老人は全てを知っている――新一は、そう確信せざるを得なかった。

「目標を達成するには色々大変なことがあるとは思うけれど、頑張

ってな。陰ながら応援しているよ」

目を細め、頬の皺を増やして老人はそう言った。躊躇いながらも、新一はとりあえず頷いておいた。

その仕草を確認してから、老人は外国人の男に向かって二本指でOKサインを作った。

「Do you understand?」

（分かっているな？）

「……あぁ」

外国人と老人の視線がぶつかるところに、新一の姿はあった。それに急かされるように、彼は再度自らの視界から光を断絶した。

新一が外国人の男に誘導されて部屋から出ようとした時、老人が一言だけ放り投げた。

「また会える日を楽しみにしているよ」

新一は立ち止まってはみたものの、当てはまる返答を見つけられぬまま部屋を出ていった。

21. Into the light（後書き）

サブタイトルの直訳：明るいところへ

22．I make a head wind a fair wind（前書

追記。

サブタイトルの件については、後書きを御覧になって下さいｍ（＿）ｍ

２００８．５．６　作者@都神紗茅

22. I make a head wind a fair wind

視界と聴覚を遮るものは一切なし。数時間ぶりに見たダイニングテーブルとにらめっこしながら、新一は何もせずにいた。そんな彼に構わず、外では太陽が堂々と輝いていた。

「あの人はわざわざ自分から出てきてくれた。さ、探す手間が相当省けて、ラッキー、だったよなぁ」

彼は、底知れぬ負の感情に支配されていた。『あの人』の自分は全てを知り尽くしているのだと告白した言葉が、幾度もリピートされることによって。

こっちの生活には慣れたかい

「あの人――全部知ってるなら、どうして今日まで何もなかったんだ？」

老人の目的は宣戦布告か最終予告か、それとも――。この時点での新一が数分悩んだところで、答への道標（みちしるべ）は見つかる気配さえ皆無だった。

「一杯飲むか」

考えが上手くまとまらなかった彼の視界に入ってきたのは、コーヒーメーカーだったのだ。透明なプラスチックの本体に、黒い蓋がついている。日本でもよく見かけるようなデザインだ。
何気なく浮かんできた
「日本」が、新一にある一人の顔を思い出させた。

「蘭のやつ、元気かな」

思い出させたと言っても、忘れていた訳ではない。心の奥に無理やりに押し込んできたのだ。
彼女を身勝手で置いてきたのは、新一自身十分承知である。勿論それは、彼女を巻き込みたくない気持ちに基づいた行動である。けれども、彼の心の真ん中には常に彼女の姿が浮かび続けていた。
この気持ちを愛しさと名づけたら、自分は愚か者と貶(けな)されるのだろうか。

「バカね」

余りにもタイムリーに聞こえたラムの声に、新一は目を見開いた。

「日本(あっち)に恋人でも残してきたのかしら？」

反論しようとしたのも束の間、新一は、タイミングをラムにあっさりと奪われた。
悔しく思う彼を全く気にせず、彼女は彼と向かい合うように椅子に腰かけた。
憐れみとも怒りとも取れない中性的な表情を崩さぬままで。
自分はそんなに分かりやすいのだろうか。そんな風に悩みながら、新一は静かに答えた。

「恋人って呼んでいいかどうかはまだ分からねぇけどな」

「あなたは彼女に何を求めたの？」

「いつか絶対に戻ってくるから、待ってて欲しいって言った」

コーヒーの薫(かお)りが漂う室内に、新一の渇いた声が響いた。
そんな新一を見て、ラムは思わずため息を漏らした。

「そう軽々しく言ったのね。生きて帰れる確証もないのに」

「軽々しくなんかねぇよ」

自分でも気づかないうちに、新一は反論していた。しかしそこから繋げる言葉が見つからなくて、コーヒーの湯気を見つめるだけだった。
二度も待たせておいて、調子のいいことをと言われたらそれまでだ。それでも、彼女を再度独りにしたことに軽々しい決意はなかっ

た。
新一の沈黙を理解したのか、ラムは表情を緩めて静かに話し出した。

「ごめんなさい、言い過ぎたわ。あなたの決意が堅いものって分かった。だからもう追求しないわ。誰でも知られたくない過去を持っているものね」

「知られたくない訳じゃねぇけど……話す時が来たら話す」

早く日本に帰る為に、まずは、ＤＦＣＣの会長について調べることだ。新一はコーヒーを一口だけ飲んだあと、ラムをまっすぐ見て言った。

「この辺りに、インターネットが使える図書館ってあるか？」

「あるけど、今日まで休館日よ。明日からは開いてるらしいわ」

「おぅ、分かった」

新一はそう言うと、残っていたコーヒーを飲み干して、カップを流し台へ持っていった。蛇口を捻(ひね)って出した水の冷たさが、彼の両手とカップを包み込んだ。

「明日から、だな」

さりげない彼の呟きは、ラムの耳には届かなかった。

22．I make a head wind a fair wind（後書

追記。

★サブタイトルの直訳：「オレは向かい風を追い風にする」

新一の心情を表しました。

★大幅変更の件ですが

今年度に入ってから勉強と部活に更に追われるようになりました。
その為、最近は執筆作業にあまり時間を回せていない状況です。
（今回の更新も、美容室での待ち時間を利用しました）
後書きにもありますが、大幅変更をいつ出来るかどうかは本当に分かりません。それでも変更は必ずします。とりあえず、現段階ではそれだけを記しておきます。
では。

２００８．５．６　作者@都神紗茅

23．Wishfulness and vagueness

新一がラムに教えて貰った図書館までは、徒歩で約十分かかった。その道のりでは、新一は様々な人とすれ違った。携帯電話で誰かと話しながらせかせかと歩く人や、それと反対に、友達と楽しげにゆっくり歩く人たちなど、正に十人十色という言葉が合っていた。重ねてきた訓練の賜物か、新一は他人を観察することが癖になっていた。そうとは言え、彼の脳内を占めていたことはそれとはまた違った。これから自分がすべきことが溢れていた。そしてその中では、図書館での調べ物が最優先となっていた。

図書館の中へ入り、新一は係員に教えて貰ったコンピュータ室へと向かった。この図書館は、膨大な蔵書を抱えていた。また、新一はその為かどうかは分からなかったが、コンピュータ室が独立して存在していたのだ。

指定された席に着くと、新一はパソコンを立ち上げた。自動的に表示された検索サイトにキーワードを入力した。

「ＤＦＣＣ……っと。よし」

新一は、まずオフィシャルサイトにアクセスした。高級感に溢れた黒のトップページが現れ、そこには様々なページへの道標があった。その中から、会社概要とあるところを選んだ。

ＤＦＣＣはＤｉｓｔａｎｃｅ　Ｆｒｏｍ　Ｃａｒｓ　Ｃｏｍｐａｎｙの略である。このサイトに拠ると、そのＣａｒｓ部分の“Ｃ”

には、ＣｕｓｔｏｍｅｒｓやＣｏｎｓｕｍｅｒｓとも当てはめられると言う。
新一は、そこまでなら知っていた。世界的に有名な車の販売会社であるから、ニュースに取り上げられることも当然多いのだ。問題は、その先だった。

「やっぱりな。間違いねぇ」

そのページには、ＤＦＣＣの社長の紹介文と写真が掲載されていた。新一自身彼のことを知ってはいたが、どのような顔だったか忘れていた。ぼんやりとしていた曖昧な確信は、本物となった。

（よし。とりあえず、第一の目的は達成だな）

新一は、次に自分がするべきことについて考え込んでいた。その過程で、ある一つの疑問が浮かび上がってきた。浮かび上がったというのは語弊があったが。調査でリバプールに行ってからと言うもの、ラムと会話を交わしたりする時などに気にしていたことである。しかしながら新一は、ラムに聞くタイミングを上手く掴めずにいた。
それは、何も起こらなすぎるということだ。
今まで新一は、何度か組織という存在に関わってきた。
それからもよく分かっていたのだが、彼らはとにかく行動が早い。
それに、仲間に対しても非情で冷血である。リバプールでの出来事から、自分の行動が筒抜けになっていることも分かった。それにも関わらず、何故命の危険が迫る気配すらないのだろうかと新一は思っていた。逆に不安になっていたのだ。
リバプールにて話したあの男性が新一の現状を知っていた理由は、この時点での新一は二つに絞れた。しかしながら、この時点では何

とも言えなかった。
新一には、自分が出来ることを慎重にやっていこうと思うことしか確かなことなかった。

「いい情報は得られたかしら？」

図書館から戻った新一に向かってラムが言った初めの言葉は、それだった。
いつも通りの微笑みを浮かべている彼女に、新一は内心たじろいだ。先程の図書館での思案もあってのことだった。本心から言っているのか、それとも――信じきることはまだ出来ないという思いがすぐに浮かぶ。しかしながらすぐに平静に戻り、頭をかきむしりながら答えた。

「まぁな。オメーのお陰で」
「それは良かったわ。ところで私、あなたに聞きたいことがあるんだけど、良いかしら？　もう夕食は作ってあるから、その時にでも」
「ああ。……明日こそは朝食作るからよ」
「それはありがたいわ。ちゃんと実行しなさいよ」
分かってるってと苦笑ぎみに呟き、新一はダイニングへと足を踏み入れた。

聞きたいことがあるのは、新一も同じであった。しかし、組織に直接繋がるものを失いたくない。その思いから、ラムに質問を投げかけることはとりあえず諦めた。

「んで、聞きたいことって？」

サラダを口にしながら、新一は聞く。さりげなく質問をしたものの、内心には焦りに似たものが少しばかりあった。ラムの質問が“確信”に触れるようなことでなければいいけれど、と思っていたのだ。

ああそれね、とラムは思い出したかのようにして、言葉を繋げた。

「あなたが日本に残してきた恋人のことを聞いてみたいと思って」

「……へ？」

ある種意外な質問をされたことに、新一は拍子抜けした。

「あら、何を聞かれると思っていたの？」

「え？　……いや、それは気にすんな。で、アイツのことか」

あっけらかんとしたい気持ちを抑えつつ、新一はこほんと咳払いをした。

「アイツについて何を話せばいいんだ？」

「うろたえなくてもいいじゃない。年齢とか性格とか、彼女に関することなら何でもいいのよ」

「バーロ、うろたえてなんかねぇよ」

そんなことを言う新一を、ラムはくすくすと笑っている。その様子を見て新一は、彼女の素顔を初めて見た気がした。

新一がうろたえていたのは事実であった。しかしながらそれはいい意味の、である。

「オレと同い年。性格は、他人の苦労を一人でしょいこんでるというか。自分より他人に優しいっつった方が分かりやすいかもしれねぇけど」

「そう。あなたは彼女のそういうところに惹かれているのね」

「……まぁな」

ラムとまさかこんな話をするとは思ってもいなかったこともあり、新一は照れくさくなった。

持っていたスプーンを静かに下ろして、ラムは言った。

「彼女を悲しませてはダメよ？　あなたの苦労を知ったら彼女、きっと苦しむわ。大切にしてあげなさいよ」

「おう」

ラムの言う通りだな、と新一は真っ先に思った。そしてその次に、彼女が自分を騙していないことを心から願っていた。彼女が自分の味方であるようにと、らしくないとは分かっていたが。

23. Wishfulness and vagueness（後書き）

サブタイトルの直訳：切望と曖昧さ

まず、更新がかなり遅くなったことに対してお詫びします。本当に申し訳ありません。下手したら1年も更新していないことになっていました（ーー；）　放置プレイもいいところだよ…と思わず自分につっこみました。では、今回の話について。あくまでこのお話は新蘭ものです（蘭は殆んど出てきていませんが）。執筆していて「新蘭ならぬ新ラムものみたいだなぁ」と我ながら思ったので、一応申し上げておきます。それでは。

24. His worry

何も言われなかった。自分もアイツに何も聞こうとしていなかった。てっきり、平和な日々を過ごしているものだと思い込んでいたから。

「平次！」

チャイムも鳴らさずに、和葉は平次の家に飛び込んできた。

彼らは、高校三年生になっていた。去年組織の奴らを倒したことも、遠い記憶の一部となりかけている。たまに彼らの話題に上ることはあるが、深くそれについて考えることはない。三年生になったことで受験勉強にも取り組むようになり、それなりに忙しい毎日を過ごしていた。

改方学園は今日から夏休みである。平次はうっとうしい授業がなくなったことでせいせいしていた。授業でやっている内容はとっくに理解しているからだ。今日はのんびり過ごそうと思っていたところであり、和葉の訪問には落胆せざるを得ない。休息という言葉を知らないんじゃないかというくらいに、いつだって彼女は元気だ。

わざと大げさに溜め息をつきながら、平次はリビングから玄関に出た。

「あのなァ、入る時はお邪魔しますくらい……」

和葉はすでに体が半分くらい家に上がった状態で、息を切らしながら言った。

「そんなこと言うてる場合やないの！　工藤君、またいなくなったんやて！」

「嘘やろ！？」

またいなくなったってどういうこっちゃ！？　もうあの組織はなくなったとちゃうんか……！

平次も、コナンと共に組織の本部に乗り込んだ内の一人であった。しかし、最後の最後でジンに拳銃で撃たれてしまい、気がついたら病院のベッドの上にいたという訳だ。そう言えば、工藤たちはあの組織のボスも捕まえて全部解決したって言うてたな……。あの後の話は何も聞いていなかった。てっきり全てが解決したかと思って何も聞かずにいたからだ。それに、驚異の回復力を以って入院してから二、三日で退院し大阪に戻ったということもあった。

「さっきまで蘭ちゃんと電話で話しててん。最近忙しくて蘭ちゃんと話すのも久しぶりやったから、『工藤君も元気してる？』って聞いたら、『またどこかに行っちゃった』って言うたんや」

「何でアイツが姿を消す必要があるんや？」

「工藤君は『事件の続きを解決しに行く』って言うてたって。どこに行くかも言わなかったみたいや。……って、平次も何も聞いてへんの？」

自分が気を失っている間に一体何があったのだと言うのだろう。

――そや、あの博士んトコの小っさい姉ちゃんなら何か知ってるんとちゃうか？

思うと同時に、玄関先に置いてあったヘルメットと財布の入ったバッグを引っつかみ、和葉の横を走っていく。

「平次！　どこ行くん！？」

「決まってるやろ、東京や！」

「はぁっ？　今から！？　ちょお待てや！」

和葉の引き止める声を振り切ってバイクを発進させた。新大阪駅まではそんなに遠くない。警察に捕まらない程度に加速させながら、あれこれ思案を巡らせた。新一が何も言わないで失踪する理由は二つに絞られた。どっちにしろ非常に危険な賭けであることは間違いない。駅までの距離がもどかしく感じられた。

博士の家のリビングに通されるや否や、平次は博士に向かって言い放った。

「一年前、俺が気失ってる間に何があったんや。早よ教えや！」

慌しい訪問者とは対照的に、哀はゆっくり台所へと歩いて行った。慣れた手つきで来客用のカップを一つ出し、ティーパックを入れてポットで沸かしていたお湯を注いだ。今の平次にとっては彼女の行動全てがもどかしい。平次がもう一度博士を急かそうとした時、哀は彼をたしなめるように言った。

「そんなに焦っても工藤君が戻ってくる訳じゃないわよ」

そして、博士への問いの答えの代わりに、湯気が立っているカップが目の前に差し出された。今はこれに構っている場合ではない。平次は目をやることもなく、ただそのままでいる。博士が困ったように目配せすると、哀はその場に立ったままで話し始めた。

「あなたは意識を失った後、ＦＢＩの人たちに外へ連れ出されて救急車で運ばれていったわ。その時建物の中での銃撃戦が一旦止んで、工藤君と博士と私はボスのいる部屋に招かれた。その部屋の中で彼が『組織の本部はシャーロック・ホームズに縁がある都市にある』って言ったの」
「ロンドンやな……そんで？」

動揺を隠せないでいる平次を一瞥してから、哀は続けた。

「彼は工藤君にＡＰＴＸ４８６９の解毒剤のデータを惜しげもなく渡したわ」
「組織にとって工藤はやっかいな敵やろ。何で不都合な情報をわざわざ敵に渡すんや？　まさか、工藤をはめるために」
「それはないわ。彼は、まるで工藤君を試しているかのような言い方をしていたもの」

でもそれは確たる証拠にはなり得ないやろ、とすぐに反論した。そもそも平次は、ボスがどこの誰だったのかということについてさえ何も聞いていない。病室に新一が見舞いに来た際に直接聞いたが、彼はそれについて何も答えようとはしなかった。全てが解決したと思いこんでいたためにそれ以上聞くこともなかった。我ながら迂闊だった、とも思う。

「あなた、ボスのこと工藤君から聞いていなかったのね。……ボスは、工藤君のことを昔からよく知っていた人間よ。あなたも知っているはず」

自分が知っている、工藤を昔からよく知る人間――思い巡らせると、ある人物に行き着いた。

「工藤のオトンか」
「彼は、工藤君に知り合いを紹介するから頼ればいいとも言ってた。その知り合いが何者なのかは聞かされなかったけど……。それから私たちは建物を脱出した。その後、建物の中に残っていたＦＢＩのメンバーに拘束され、警察に逮捕されたと聞いたわ」

それなら彼がボスのことを自分に話さなかった気持ちも分からなくもないか、と納得した。

「そして工藤君は私が完成させた解毒剤を飲んで元の姿に戻ったわ。それから一週間後に、私たちには何も言わなかったけれど、おそらく――ロンドンに向かったっていう訳。もうすぐ一年経つけど、連絡は一切ないわ」

まさか更に手強い敵に立ち向かっている最中だとは、数時間前の自分なら一切信じなかっただろう。
平次にとって何よりショックだったのは、それらのことについて一切教えられていなかったことだった。少しは頼ってくれたっていいのに、どうして独りで全てを何とかしようとするのだろう。思い返せば、いつも彼は彼以外の人たちに最小限危害が及ばないように振舞っていた。その性格は優しいとも言えるだろうが、今は怒りに似た気持ちだけが沸いてくる。

「あのアホ、こうなったら今すぐにでもロンドンに行って……」
「私も出来ることならとっくにしてるわよ！」

哀は先程までの表情を一変させ、叫ぶように言い放った。

「でも、工藤君にあんなことを言われたら……」

あんなことって何やと聞くが、哀はそれには答えずに、

「信じるしかないのよ」

と続け、それきり黙りこんだ。ようやく平次は理解した。もどかしい気持ちを抱いているのは自分だけではないということを。

うつむいている哀の気持ちを考慮し、視線を移して博士に問うた。

「あの探偵事務所の姉ちゃんには何か言うたんか？」

「いいや。蘭君はあの日以来ここに来ておらんし、偶然会った時も新一君の話は一切しておらんよ」

話を一切しないのは逆におかしい、とすぐに思った。自分たちすら詳細を聞いていないのだから、まさかあの彼女が事情を知っているはずがあるまい。ってことは、まさか？

気持ちが少々落ち着いたのか、哀は平次の思索に答えるように話し始めた。

「工藤君が元に戻った後、解毒剤の効果が完全かどうか確かめるために試験期間を設けたの。その間に彼女と会っていたみたいだから、その時に工藤君が口を滑らせたかどうかまでは分からないわ。まぁ、彼がいなくなってからも彼女は普通に過ごしているみたいだし、多分ほとんど何も聞かされていないと思うわ」

「今まで何もないなら、これから何か起こるんとちゃうか？」

――平次の言葉は、当たっていた。

２４．Ｈｉｓ　ｗｏｒｒｙ（後書き）

サブタイトルの直訳：彼の心配

二年ぶりの更新です。お待たせして本当に申し訳ありません！
これからは修正も少しずつやりつつ、着実に更新していきます。
今年中には完結させたい…

25. She said that "she" is

平次が博士の家を訪れた日から一週間。その家の前には、一人の少女の姿があった。家の主が出てきたと同時に彼女は話を切り出した。

「ねぇ博士……博士だったら、新一が今どうしてるか知ってるよね？」

彼が再びいなくなってから、彼女――蘭はずっと誰にも何も聞かずにいた。自分でも何故かは分からなかったが、何も聞いてはいけないような気がしていたのだ。しかし、やっぱり不安でしかたなかった。

例の「組織」を倒した時に協力していたらしい（と、蘭は聞いていた）博士なら何か知っているだろうと思った次第である。

知っている。彼の顔はまさにそう語っていた。

「いや、ワシも何も聞かされていないんじゃ」

「だって博士、コナン君のことも知ってたんでしょ？　今の新一のことだって」

「本当に何も知らないんじゃ」

突然家に押しかけて、玄関先でいきなりこんなことを問い詰めて、迷惑だとは分かっている。だけど止められない。彼に置き去りにされている一方、自分は彼を置き去りにして高校三年生になってしまった。一緒に過ごして行くはずだったのに、どうしてこうなってしまったのだろう……と、毎日考えていたのだ。

「あなた、彼のことを何も分かってないのね」

小さな影が、博士の後ろからひょっこり姿を現した。彼女は少女の姿にそぐわない鋭い眼差しを蘭に向け、吐き捨てるように言った。

「大体、彼が今何をしてるか聞いてどうする気？　そこに押しかけて会いに行くの？　そんなのただの自己満足だわ」

「コレ、哀君！　言い過ぎじゃ。蘭君だって新一君のことが心配で言っておるんじゃから」

哀の言葉は正しいと思わざるを得なかった。新一が自分に連絡を取らないのは何か訳があるに違いない、ということは分かる。だが、今の蘭にそのことを考慮している余裕はなかった。哀の、まるで新一がどう過ごしているかを分かっているような口ぶりが癪に障る。どうして幼馴染でもないあなたが新一のことを知っているのよ――蘭は両手をぎゅっと握り締め、言葉を返した。

「その言い方――哀ちゃん、新一が今どこにいて何をしているのか知ってるのね」

「さあね。まぁ、もし知ってたとしてもあなたには言わないでしょうけど」

「どうしてよ？」

怒りを通り越してもはや涙が出そうだ。行き場のない悲しみと寂しさをどこにぶつければいいのか分からない。

今にも泣き出しそうな表情を浮かべる蘭と対照的に、哀は表情を一切変えずに言った。

「じゃあ逆に聞くけど、あなたはどうして彼があなたに何も教えないで行ってしまったか分かる？　……それは、彼がお人好しだからよ」

言葉の意味を酌めなくて、蘭は黙り込んでしまう。呆れるわね……とでも言いたそうな表情になってから哀は続けた。

「江戸川コナンとして過ごしていた時、彼はあなたに正体を隠し続けたでしょう。その理由と同じよ。彼は、あなたを危険な目に遭わせたくないってこと。あなただけじゃないわ。私や博士も含めて、自分に関わる人たち全てに危害が及ばないように、詳しいことは何も話さずにいなくなったって訳」

哀の言葉が全てだった。腕を組んでさらりと言ってみせる姿に、蘭は何も反論出来ない。否、既に反論する気力を奪われていた。

「とにかく、あなたに出来るのは彼を信じて待つことね。それだけでも彼の救いになるはずだわ」

この子は、やっぱり新一の全てを知ってるみたいな話し方をする。幼馴染としての立場をあっさり奪われてしまったように感じた。自分は、今確かにこの少女に強く嫉妬している。

「哀ちゃん、どうしてそこまで分かるの？」

わたしよりも、新一のことよく分かってるみたいだよね。不安げな表情を浮かべながら問う。自分よりも小さく幼い少女に恐れすら感じて、再び両手を握り締めた。

「そんなに身構えることはないわ。別に、彼をあなたから奪おうなんて気はさらさらないから」

「奪っ……！？」

自分の心を見透かされたかと思った。動揺を隠せない。彼女の瞳を見ていると、考えていることがくまなく知られてしまいそうだ。

新一から、彼女が自分よりも年上だと言うことは前に聞いたが――やはり見た目とのギャップにどきりとしてしまう。

「それに……離れている今も、彼はあなたのことを一番に気にかけているだろうから」蘭にとっては思いがけない一言だった。「じゃあ、もう聞くことはないわね」

蘭の返答を聞く前に、哀は部屋の奥へと消えていった。玄関に残された二人は、ただ静かに閉じられた扉を見つめるばかりだ。

博士は何とも言えない様になった空気を取り繕うかのように、言った。

「スマンのう。哀君に悪気はないんじゃ。君には新一君を信じてあげて欲しいって思ったはずじゃから」

「うん……本当、新一のこと考えずにただ会いたいだなんて、自己満足だよね。わたし、ちゃんと新一を信じて待つよ」

アイツは、あの時もちゃんと約束を守って戻ってきてくれたものね。

そう付け加えると、蘭は博士にお詫びと礼を言って彼の家を後にした。門から外に出ながら、隣にある家を見る。いつ帰ってくるか分からないし、掃除もちゃんとやっておかなくちゃ。家を綺麗にして、自分に出来る精一杯の笑顔で彼を出迎えてあげたい。絶対に帰ってきなさいよ！　心の中で叫んだ。

帰っていく蘭を、哀は二階で窓越しに見つめていた。先日やって来た関西のお友達といい、あの子といい、本当に工藤君のことが心配なのね、と思った。人のことは言えないからお互い様である。

新一がロンドンへ発つ、数日前のこと。彼は健康状態の観察のために博士の家に来ていた。
検査の結果は良好、全く異常なしだった。それを告げると彼はほっとした表情を浮かべ、机の上に置いてあったボールペンをくるくる回し始めた。言うなら今しかない――哀は、数日間溜めていた想いを吐き出した。

「工藤君。私も、あなたと一緒にロンドンへ行くわ。あなた一人に全て負わせる訳にはいかない。私があなたの体を小さくした原因を作った張本人だもの」
「確かにあの薬を作ったのはオメーだけど、オレがコナンになったのは自業自得だ。だから自分でケリをつけに行く。……まぁ、本部がまだ残ってるって聞いた時はさすがにショックだったけどな」
「でも、私……」あなたを一人にさせたくない！　と言う前に、彼は言葉を続けて、
「オメーはオレを元の工藤新一の姿に戻してくれただろ。だからもう何も気にしなくていいんだよ」

哀は、目頭が熱くなるのを感じた。目の前に広がる世界の輪郭がぼやけて、彼の表情すらも分からなくなった。

「バーロ、んな泣きそうなツラすんなよ。オメーらしくねーぞ？」

両目をこすってからすぐに見えたのは、笑顔だった。だからこそ哀は、彼の中にある強い覚悟を実感せざるを得なかった。

旅立つ日も彼はこの時と全く同じ笑顔を浮かべていた。今でもはっきりと覚えている。これから旅立つ彼に心配をかけたくなかったから本心は隠したけれど。何の音沙汰もない、日々が過ぎて行く度に後悔は募っていった。彼を見送った自分に何度腹が立ったことだろう。あの時、無理やりにでもついて行くべきだったんだ、と何度思っただろう。

未だに待つことに徹しきれていないのだ。平次や蘭に言ったことは、実は無意識のうちに自分自身に言い聞かせていたことだったのかもしれない、と思った。

窓を背にすると、階段を下りて一階のリビングへ行き、ソファに静かに腰掛けた。

「蘭君は、新一君を信じて待つって言ってたぞ」

「そう」

哀の気持ちを悟っていたのか、博士はそれ以上話を続けなかった。実際哀は先程のことについてはあまり触れて欲しくなかったのだ。あんなことをするなんて自分らしくなかったわ、と内心苦笑した。ただ、彼女に分かって欲しかっただけだった――彼が、彼女や自分達のことを思ったからこそあのようにいなくなったということを。

25. She said that "she" is

サブタイトルの和訳：彼女は、「彼女」は自己満足だと言った。そして……

彼女＝哀、「彼女」＝蘭ですね。新一がいなくなってから一年後の日本編はこれにて終了（短っ！）。次の話からロンドン編に戻ります。

ロンドン編といえば去年の夏に原作でやってましたね（71巻収録）。今年の夏にはアニメ化されるのかな？　今から楽しみです（＊^^）

そういえば服部さん、キーパーソンではない……ですね（^^；）

26. Suspicion

幸運はそう何度も続かない。

新一とラムが捜査を開始してから一年が経過した。ラムが記憶している限りの本部にまつわる場所は、何箇所も訪れた。しかし、直接今のそれへ繋がる手がかりは得られずにいた。

夜中の二時、新一は自室にこもって今まで集めた大量の資料に目を通していた。それのせいで木製の机の上はごちゃごちゃになっていて、他の物を置くスペースもない。目を通すのを一旦止めて机の上に目をやると、思わずため息が出た。いつになったら、彼らへと繋がるものへ辿りつくことが出来るのだろうか。いつになったら、彼女――蘭の元に帰ることが出来るのだろうか。賢い頭はそのための手立てを簡単に導いた。どんなに先が見えなくても、今出来ることをひたすらやるしかない、と。とりあえずリラックスするために、水を飲みに行くことにした。

あくびをしながら部屋を出ると、ちょうど向かい側にあるラムの部屋のドアが開いていることに気づいた。隙間から明かりがこぼれている。まだ起きているのかな、と思ってそこへと近づいていくと、彼女はどうやら誰かと電話をしているらしかった。盗み聞きは悪いことだとは当然分かっているが、気になって聞き耳を立てた。

「Ｍｒ．　Ｇｒｅｅｎ？　ごめんなさいね、全然連絡を取らなくて。ちょっと色々あったのよ」

「そうか。もし……に……たら終わりだぞ」

ラムの電話の相手はどうやら大声で話しているらしく、新一は彼の声も途切れ途切れではあるが聞くことが出来た。

彼らって、誰のことだろうか――？　新一の思索をよそに、会話

は続く。

「大丈夫。今のところ、彼らには気づかれていないみたい。調査を進めているところよ。まだまだ時間はかかりそうだけど」

「きみが……ている……何ていう名の少年だっけ、彼のことどう思う？」

「工藤新一。日本で有名な探偵とは知っていたけど、正直ここまでのものとは思わなかったわ。あなたたちが欲しがるくらいの人材かもしれないわね」

「本当かい？　……たら是非とも……みたいものだね」

会話が全て聞こえないせいで状況がつかめない。新一は更に扉に近づき、何とか会話を全て聞こうと試みた。

「ところで、例の計画……ボスからのお許しは出たかしら？」

「うーん、やはり……が決まらないこと……とまではいかないね。……には……だが」

「なるほどね。日にちは――まだもう少し先になりそうよ。その時が決まったらまた詳しく伝えるわね。私の気持ちだけでなくあなたたちの威信にも関わることだもの、任務はきちんと遂行するわ」

「……だよ。きみは正式な我々のメンバーではないのだから、……と思ったらすぐに……」

「何を言ってるのよ、私があなたたちに協力すると決めたんだから、そんなこと思ってないわ。どっちにしろ、もう私には逃げ道はないのだし」

「そうか……気をつけて」

胸の動悸が激しくなったのが分かった。彼女と初めて出会った時、確かに新一は彼女のことを「組織の人間なのではないか」と疑っていた。しかし彼女と一年間関わってきたことで、彼女に対する信頼

感は揺るぎないものとなっていた（と、新一自身は思っていた）。自分自身の思考が導いた、信じたくないけれどほとんど確かなことに、彼は動揺させられた。

息遣いを何とか整えて、震える手で部屋のドアを数回ノックした。

「あら、こんな時間にどうしたの？　ほら、ここに座って」

ラムは普段通りの表情のまま言う。彼女が動揺を隠しているのか、それとも全く後ろめたいことがないのかは、新一には分からなかった。

「いや、すぐに終わるからいいよ」示された椅子の近くに立ったまま、本題に入った。

「オメー、さっきまで誰と電話してたんだ？」

ラムは新一から目線をそらし、自分の組んだ腕を見つめている。彼女の長い黒髪のせいで表情は見えなくなった。それによって新一の不安は増していく。

「あぁ……聞いてたのね。まぁ、ちょっとした知り合いよ」

「まさか……」

組織の奴らじゃねぇだろうな？　と言い掛け、口をつぐんだ。

「時が経てば分かるわよ。まぁ、知らない方がいいこともあるけどね」

新一の考えていることを知ってか知らずか、ラムはさらりとそう答えた。

「どういう意味だ？」

「そのままの意味よ。話はそれだけ？　だったらもう部屋に戻って

休みなさい。明日はまた出かけるからね」

追い出されるように新一は部屋から出た。ラムがもし組織のスパイなら、どうしてオレを殺そうとしないんだ？　危険な芽はすぐにでも摘んだ方がいいのに――泳がせとけっていうことか？　あの様子だと、何を聞いても答えてくれなそうだな。結局オレはラムに頼るしかねぇし、とりあえず行動は共にすることにすっか。

何度か深呼吸をしたのに、この夜新一の心が落ち着くことはなかった。

26. Suspicion（後書き）

サブタイトルの直訳：疑念

27. Memories that she has

「今日の夕方――ちょっと行きたいところがあるから、私についてきて」彼女はそう言った。

新一とラムの滞在している家の、最寄り駅から数十分。こぢんまりとした駅に二人は降り立った。到着するや否や、ラムはどこかへ向かって歩き始めた。カツ、カツ、カツ。ラムの履いているハイヒールが地面と当たって独特な音を生む。自分より数メートル先を歩く彼女を、新一は走る寸前の速度の早歩きで追っていた。どうしてそんなに急ぐんだ、どこに行くつもりなんだと問うても答えは返ってこない。

数分歩いたのち、小さなレストランの前でラムは立ち止まった。そこの看板には「Ｊａｐａｎｅｓｅ　ｒｅｓｔａｕｒａｎｔ　ＦＵＪＩＭＩＹＡ」とある。開業してから長いのか、見た目は古ぼけているが、それが独特で落ち着いた、そしてどこか懐かしいような雰囲気を醸し出していた。

木の扉を開くと、カランコロン、と来客を知らせる音が鳴った。中ではオルゴール調のＢＧＭが流れており、何人かの客が夕食を取っていた。

入口辺りで立つ二人の元に、店主らしき男――大体、六十歳から七十歳くらいに思える――がやって来た。

「Ｈｅｙ，ｌｏｎｇ　ｔｉｍｅ　ｎｏ　ｓｅｅ！　って、君は確か日本語話せるんだったね。いやー、一体何年ぶりだろうね？　面影はあるけど、随分大人っぽくなったね」

「ありがとう。最後に来たのは、確か私が十歳の時だったと思うわ」

「そうか、そんなに来てなかったのか。いつもの部屋はちゃんと取

ってあるから、そこに行ってね。昔のままにちゃんとしてあるからね」
「ええ」

二人の会話を全く理解できないまま、新一はラムの後を追った。
「いつもの部屋」というのは、レストランの一番奥にあった。襖を開いた先に見えてきたのは、八畳の和室であった。部屋の真ん中には長方形の机が置いてあり、その上にはおしぼりやメニューがある。向かい合う形で、二枚の座布団が置かれていた。それに加えて、襖側から見て左奥に、一畳にも満たない狭さの床の間があった。大きな灰色の花瓶には色とりどりの花が飾られている。
ラムに「座って」と促されたので新一は靴を脱いで畳に上がり、座布団の上であぐらをかいた。

「来たかったのってこのレストラン？」
「そう。かつて、祖父と二人でよく来ていたところよ。さっき私と話してた人は、祖父の中学・高校の同級生よ。だから数十年来の友人というわけ」
「……ちょっと待て。オメー、組織に入る前に親しかった人とは一切連絡を絶ってるって言ってたよな？　今会ってるけど、いいのか？」
「彼は私がそういうところで活動していたことは知らない。それに彼は信頼の置ける人。ここに連絡した時に『私がここに来たことは、絶対に誰にも言わないで。例え私の身内に何か聞かれたとしても、絶対に』って言っておいた。どうしてもここに来たかったの」

そう言ってラムは、懐かしそうに周りを見回した。きっと祖父との思い出をかみしめているのだろう。
彼女に気を使って、新一はそれ以上突っ込むことなく、とりあえずメニューを眺めることにした。日本にある定食屋のようなメニュー

が並んでいる。
従業員が二つのグラスとお代わり用のボトルを運んできて、いくつか事項を述べる。目の前にいるラムの真意が気になって、新一はほとんど聞いていなかった。
従業員が部屋を出て行ったのを皮切りに、会話は再開された。

「ここはオメーの思い出の場所ってことか」
「その通りよ。祖父が仕事をこっそり抜け出して、よく一緒にここで私とかつ丼定食を食べていたの。さっきの方……藤宮さんに『絶対に言うなよ！』なんて言っててね」
「へぇ……そっか」

ラムが思わず見せた笑顔につられ、新一も思わず頬が緩んだ。今だけなら組織のことも忘れていいんじゃないだろうか、と一瞬思った。彼女が味方だろうが敵だろうが、今だけはと――。

「それに、たまにはちゃんと休息を取らないと長期戦に耐えられなくなるから。こうやって過ごすのも大切なことだと思うわ」
「そうだな、オメーの言うとおりだな」

せっかくだから、ラムとラムの祖父が一緒に食べたかつ丼定食を頼むことにした。

日もすっかり暮れかけた頃、二人は家に戻ってきた。
今日は順番的に、新一が先に入浴する日であった。入浴の準備をさっさと済ませ、彼は脱衣所へと入っていった。
彼が風呂から出るまで、部屋で少し作業でもしてようと考えたラムは、階段を上がっていった。二階に上がりきった時、ふと新一の部屋を見ると、ドアは開けっ放しの上明かりもつけっぱなしであった。

「全く、しょうがないわね」

ぶつぶつ呟きながら、部屋の電気を消そうとして部屋の中に入った。その時、新一の机の上に散乱する資料が目に入ってきた。悪気はなかったが、何となく気になってその中の一枚を手に取った。どうやら彼が調べた情報を独自にまとめてプリントアウトしたものらしい。その見出しには「ＤＦＣＣ」とだけ書いてある。そして文章やグラフが並ぶ中に、ある人物の画像が一枚だけ載っていた。それを見てラムは、ぽつりと誰にも聞こえないような声で呟いた。

「……おじいちゃん」

27. Memories that she has（後書き）

サブタイトルの直訳：彼女の持つ思い出

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4505c/

海

2011年10月3日20時45分発行